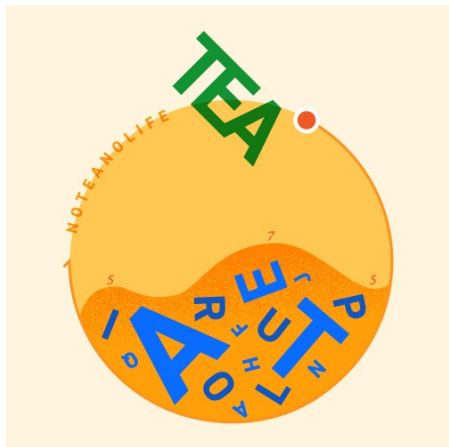




*Japanese Association of
TEA for Qualitative
Inquiry*

TEAと質的探究学会第4回大会予稿集

旅する TEA～俳句と心理学の街 松山

日時：2025年5月24日（土）-25日（日）

場所：2025年5月24日（土）オンライン&対面

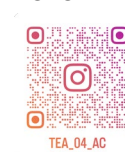
2025年5月25日（日）オンライン&対面

対面会場：人間環境大学松山道後キャンパス



Instagram はじめました

Follow Me!



目次・プログラム

対面会場へのアクセス	2
オンライン会場へのアクセス	8
発表者の方へ	9
大会スケジュール一覧	10
抄録集	
1 日目 対面&オンライン	
10:00 コメントセッション(対面&オンライン)(計 8 件)	13
特別講演(対面&オンライン)(計 1 件)	21
12:00 総会(対面&オンライン) / 昼食(対面)お弁当無料提供	
13:15 優秀論文賞表彰・発表(対面&オンライン)(計 3 件)	23
13:30 大会シンポジウム(対面&オンライン)(計 1 件)	24
15:00 休憩:(対面)松山スイーツ・コーヒー等の無料提供	
15:30 大会特別シンポジウム(対面&オンライン)(計 1 件)	26
招待講演(対面&オンライン)(計 1 件)	28
18:00 情報交換会	
2 日目 対面&オンライン	
10:00 大会記念講演(対面&オンライン)(計 1 件)	30
一般口頭発表・第 1 セッション(対面&オンライン)(計 4 件)	31
ポスター発表・第 1 セッション(対面) (対面 11 件)	34
12:00 昼食:(対面)お弁当無料提供	
13:00 大会実行委員企画シンポジウム(対面&オンライン) (計 1 件)	43
講習会(対面)(計 1 件)	45
一般口頭発表・第 2 セッション(対面&オンライン)(計 4 件)	47
ポスター発表・第 2 セッション (対面) (対面 10 件)	51
14:50 休憩:(対面)松山スイーツ・コーヒー等の無料提供	
15:00 一般口頭発表・第 3 セッション(対面&オンライン) (計 4 件)	59
ポスター発表・第 3 セッション (対面) (計 11 件)	63
15:15 研究交流委員会企画ワークショップ (対面) (計 1 件)	70
講習会 (対面) (計 1 件)	71
17:00 大会終了	

対面会場へのアクセス

アクセスマップ：

【会場】

人間環境大学松山道後キャンパス（〒790-0825 愛媛県松山市道後樋又 9-12）

△注意△人間環境大学松山キャンパス（松山市花園町）とお間違えないようにお願いします。

【交通案内】

■ 松山までの交通経路

● 航空機でお越しの場合

松山空港への直通便は以下の図のとおりです。

※移動当日の航空機の運行状況は、各航空会社のホームページ等でご確認ください。

航空 路線図

※ 記載されている所要時間は目安です

福岡（福岡空港）
⇄ 愛媛（松山空港）
45分 ～ 50分

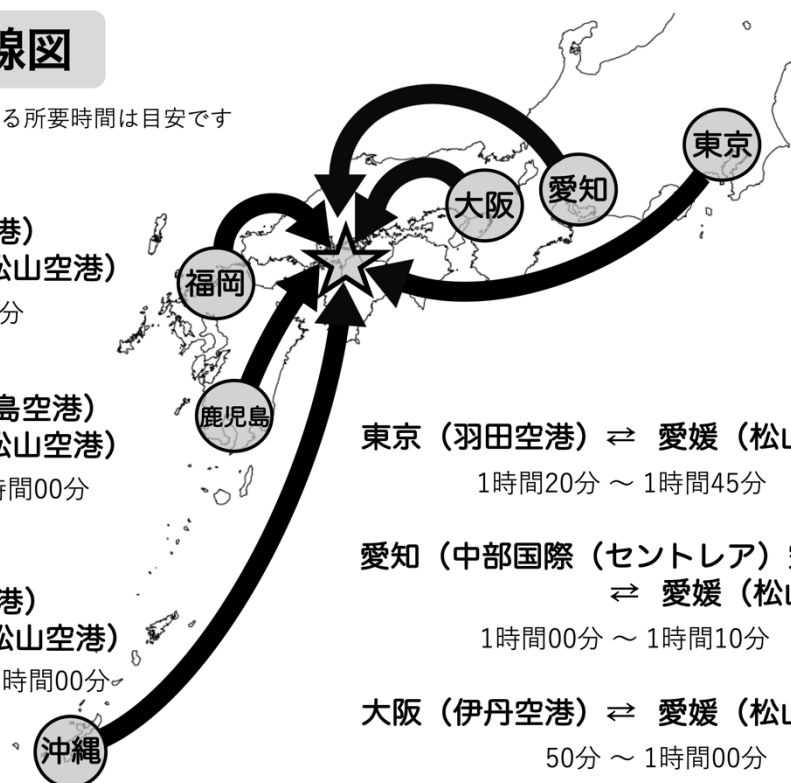
鹿児島（鹿児島空港）
⇄ 愛媛（松山空港）
55分 ～ 1時間00分

沖縄（那覇空港）
⇄ 愛媛（松山空港）
1時間45分 ～ 2時間00分

東京（羽田空港）⇄ 愛媛（松山空港）
1時間20分 ～ 1時間45分

愛知（中部国際（セントレア）空港）
⇄ 愛媛（松山空港）
1時間00分 ～ 1時間10分

大阪（伊丹空港）⇄ 愛媛（松山空港）
50分 ～ 1時間00分



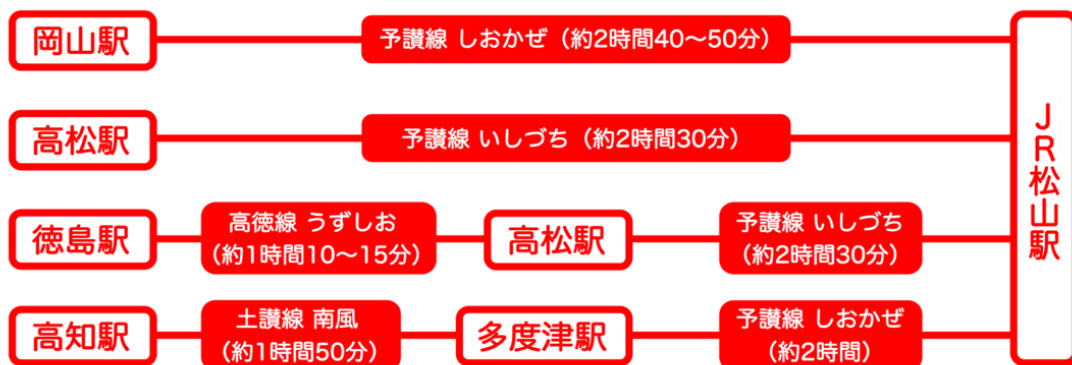
●陸路（鉄道）でお越しの場合

本州各地から陸路（鉄道）にてお越しの場合は、JR 新幹線などで JR 岡山駅へお越しください。JR 岡山駅からは、予讃線の「特急しおかぜ」が便利です。その他の四国各地からは、以下の図のとりの経路がごさいます。

JR 松山駅発の特急は、一部列車を除き、松山駅～岡山駅間を走る特急「しおかぜ」と松山駅～高松駅間を走る特急「いしづち」とが併結して走ります。1～5 号車が「しおかぜ」、6～8 号車が「いしづち」です。途中の宇多津駅もしくは多度津駅にて「しおかぜ」と「いしづち」が分けられ、JR 岡山駅と JR 高松駅にそれぞれ向かいます。

J R 路線図

※ 記載されている所要時間は目安です

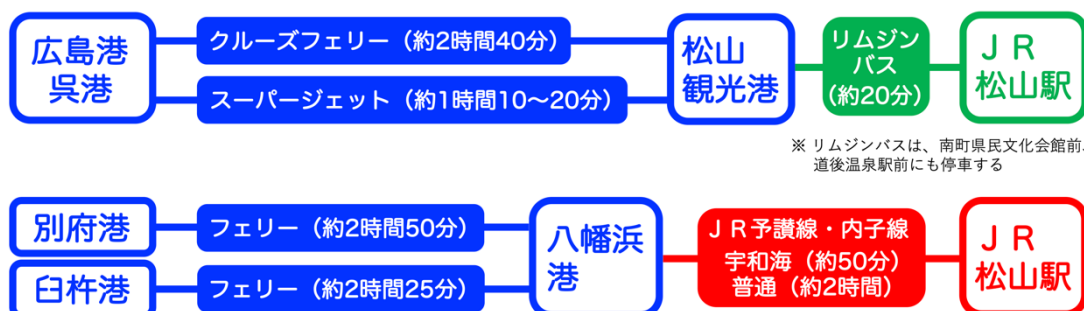


●海路（フェリー）でお越しの場合

以下の港よりフェリーにて、愛媛県松山観光港・八幡浜港までお越しいただけます。

海路 路線図

※ 記載されている所要時間は目安です



※ リムジンバスは、南町県民文化会館前、道後温泉駅前にも停車する

■松山市内～会場付近までの公共交通機関のルート

●松山空港からリムジンバス/路線バスで移動する（航空機でお越しの場合）

リムジンバスは、航空機の到着に同期して出発いたします。空港正面を出て左にある券売機にて乗

車券を購入，ご乗車下さい。会場最寄は「南町県民文化会館前」（会場まで徒歩 20 分弱，やや遠い）ですが，JR 松山駅で下車し，次項で説明する伊予鉄市内線(1 番)で「日赤病院前」まで来ることをお薦めします（近い，10 分弱）。

※リムジンバスは（路線バスは駄目），SUICA，ICOCA など全国交通系 IC カードが使えます。航空機の到着には同期しませんが（15 分に 1 本），リムジン乗り場先のバス停から，路線バス「湯ノ山ニュータウン」行きで，「日赤前」まで行くこともできます。大きな荷物が無ければ，こちらがお薦めです。

○リムジンバスの詳細および時刻表 <https://www.iyotetsu.co.jp/bus/limousine/airport/>

○路線バスの詳細および時刻表

<https://www.iyotetsu.co.jp/sp/rosen/bus/time/38.pdf>

●JR 松山駅から市内電車（路面電車）で移動する

JR 松山駅から会場に移動するには，市内で運行する市内電車（路面電車）をご利用ください。JR 松山駅から徒歩で市内電車（路面電車）の JR 松山駅前まで移動し，①番環状線（JR 松山駅～古町～大街道～松山市駅行き）に乗車し，「赤十字病院前」で下車してください。

市内電車（路面電車）の乗り方

- ・運賃は後払い方式です。乗車の際はそのままご乗車ください。
- ・降車の駅に到着する前に，車内の降車ボタンを押して知らせてください。
- ・降車時に，運賃（どこで降りても一律です）を運賃箱に入れてください。
- ・現金でお支払いの場合，おつりは出ないので，事前に両替機で両替をしてお支払いください。
- ・SUICA，ICOCA，MANACA，PASMO など全国交通系 IC カードがご利用いただけます。

※車内でのチャージはできません。コンビニ等で事前チャージした上でご利用ください。

- ・運賃は，キャッシュレス 210 円，現金 230 円（いずれも大人料金）です。

- 会場最寄駅（路面電車，赤十字病院前）・バス停（日赤前）より会場まで

路面電車 赤十字病院前（市内電車）にて下車後，線路と直行する道路を北に向かい（右手に日赤病院，左手に愛媛大学を見る方角），徒歩 5 分ほどで護国神社の鳥居があります。その左隣が会場です。

路線バス「日赤前」で下車後，バスの進行方向とは逆に 30 m ほど戻り，交差点を右折，線路を渡ります。その後は，直進すると徒歩 5 分ほどで護国神社の鳥居があります（前項と同じ）。



学会会場案内

人間環境大学総合心理学部（松山道後キャンパス）

1号棟

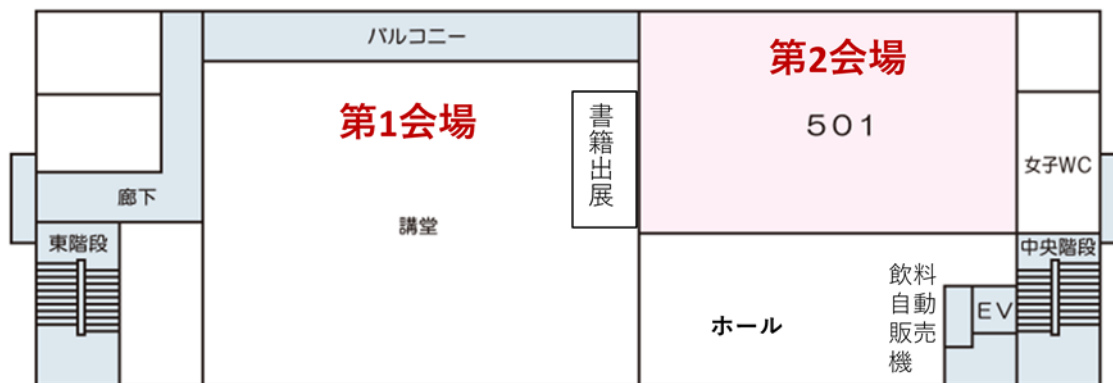
※新館の3号館の後ろになります。1階玄関からお入りください。

受付： 1階玄関
学会会場：4階・5階

※松山には、人間環境大学松山看護学部（松山キャンパス）も
ございますので、場所をお間違えないようにご注意ください。



1号館5階



1号館4階



飲料の自動販売機は、1号館1階の学生ホールにも
ございます。

オンライン会場へのアクセス

本大会は、第一日目第二日目ともに一部のプログラムをオンライン配信します。参加するための Zoom の URL は、大会ウェブサイトの「参加申し込み完了者用ページ」内のプログラム一覧に掲出します。このページに入るには、ID とパスワードが必要です。ID とパスワードは、大会 3 日前までに、Peatix に登録されたメールアドレス宛にお送りします。メールが届かない場合は、teaandqualitative@gmail.com（大会事務局）までお問い合わせください。

大会特別シンポジウム、大会実行委員企画シンポジウム、総会、優秀論文発表、招待講演、大会記念講演、特別講演、一般口頭発表、コメントセッションは、ハイブリット開催となり、Zoom でも配信されます。参加者はプログラム一覧に記載されている Zoom に各自でお入りいただくようになります。（実際の対面会場毎に Zoom が設定されますので、そこにアクセスしていただく予定です）。なお、記録のために録画を予定していますので、その点ご了承ください（後日の配信はございません）。

なお、Zoom にログインした際、Zoom 上に表示される名前と所属は、大会参加時に登録したものにしてください。

発表者の方へ

コメントセッション・口頭発表で発表の方へ

- ・本大会は、対面とオンラインのハイブリットで行われます。そのため、対面においても Zoom を用いた発表になります。会場では、本学会が準備した P C を使用して発表していただきます。使用する PC は、Windows になります。Macintosh は使用することができませんのでご了承ください。
- ・本会場では、Wi-Fi の準備はございません。
- ・発表データは、セッション開始 30 分前までに各発表会場の PC にデータを入れて下さい。USB フラッシュメモリなどにデータを入れ、ご持参ください。バックアップデータを作成するため、5 月 22 日 17 時まで担当者に発表データを送ってくださるようお願いいたします。
- ・オンラインで参加される方は、各自の責任で発表データをご準備ください。
- ・PC に保存したデータ・バックアップデータは、本大会終了後に大会責任のもと消去いたします。
- ・口頭発表は、セッションごとに座長を演者の方に行っていただきます。シナリオを大会よりお渡ししますので参考にしてください。
- ・発表時間について

【コメントセッション】1 演題 20 分、コメント 15 分です。

【口頭発表】1 演題 20 分、ディスカッション時間 20 分（演者 4 名の発表後）です。

示説（ポスター）で発表の方へ

- ・サイズについて
最大サイズは、A0（841×1189mm）です。設置用の磁石等は大会の方で準備いたします。演題番号は、大会側で掲示パネルに示しています。
- ・貼付時間・撤去時間について
会場の都合上、貼付時間は各セッション開始の 30 分前を厳守をお願いいたします。貼付場所は、大会側で指定させていただきます。セッション終了後は、次セッションのためにすぐにポスターを撤去してください。
- ・発表時間について
各セッションは、90 分です。責任在籍時間は特に指定しませんが、発表時間中はできるだけご自身のポスターが見える位置にいますようにしてください。

大会スケジュール一覧 ※敬称略

5/24 (土)

9:15 受付開始 «1 号館 1 階受付»

10:00 コメントセッション(対面 & オンライン)«501, 401, AO 教室 1 »

コメンテーター：サトウタツヤ, 安田裕子, 中坪史典

10:00 特別講演(対面 & オンライン)«講堂»

「TEA をもちいた交差混合研究法デザイン-MM-TEA の可能性」

登壇者：廣瀬眞理子, John W. Creswell

12:00 総会(対面 & オンライン)«講堂»/昼食(対面)お弁当無料提供«5 階ラウンジ»

13:15 優秀論文賞表彰・発表(対面 & オンライン)«講堂»

司会：安田裕子, 森直久

優秀論文賞：

- ・豊田香・卒田卓也 第 1 巻第 1 号「[単方向 TEA]から[双方向 TEA]を開発する試み—不登校経験家族を事例として」
- ・中野祥子 第 1 巻第 1 号「在日ムスリム留学生のヒジャーブ着脱行為をめぐる価値の変容過程—TEA による 3 名の事例分析」
- ・白崎知美 第 2 巻第 1 号「小児医療における治療拒否の自己決定に関わる家族や医療者の苦悩や葛藤と相互理解—TEM 図と TLMG による分析を手掛かりに」

13:30 大会シンポジウム(対面 & オンライン)«401»

「TEA と LLM (大規模言語モデル) との出会い」

登壇者：杉山滉平, 中田友貴, 遠藤純音, 北村尊義

15:00 休憩：(対面)松山スイーツ・コーヒー等の無料提供«5 階ラウンジ»

15:30 大会特別シンポジウム(対面 & オンライン)«講堂»

「『ホーム』と『居場所』の文化心理学・発達主体による境界形成の探究」

登壇者：土元哲平, Marc Antoine Campill, 神崎真美, 小澤伊久美, Luca Tateo, サトウタツヤ

15:30 招待講演(対面 & オンライン)«501»

「TEA を用いた教育臨床における葛藤の可視化」

登壇者：川上康則(オンライン)

司会：三田地真実, 指定討論：安田裕子

18:00 情報交換会《オールドイングランド道後山の手ホテル・アルバートホール》

[山の手ホテルについて | オールドイングランド 道後山の手ホテル](#)

※要：参加申し込み

5/25 (日)

9:15 受付開始 《1 号館 1 階受付》

10:00 大会記念講演(対面&オンライン)《講堂》

“How to study psychological atmospheres?”

登壇者：Jaan Valsiner(オンライン)

通訳・解説：サトウタツヤ

10:00 一般口頭発表・第 1 セッション(対面&オンライン)《401》

ポスター発表・第 1 セッション(対面)《4 階ラウンジ》

12:00 昼食：(対面)お弁当無料提供《5 階ラウンジ》

13:00 大会実行委員企画シンポジウム(対面&オンライン)《講堂》

「キャリアと記号：非可逆的時間の中で径路を描く意味」

登壇者：市川章子, 宮下太陽, 石田百合子, 小山多三代, 桎木史子, 小澤 伊久美,
ウォーカー泉, 安田裕子

13:00 講習会(対面)《501》

「TEA と未来等至点で描くキャリアデザイン—延長線にない未来にむけたワーク」

登壇者：豊田香

13:00 一般口頭発表・第 2 セッション(対面&オンライン)《401》

ポスター発表・第 2 セッション(対面)《4 階ラウンジ》

14:50 休憩：(対面)松山スイーツ・コーヒー等の無料提供《5 階ラウンジ》

15:15 研究交流委員会企画ワークショップ(対面)《講堂》

「hana-TEM アートで描くわたしの径路」

登壇者：中坪史典, 土元哲平, 上川多恵子, 中本明世, 加藤望

15:00 一般口頭発表・第3セッション(対面&オンライン)《401》

ポスター発表・第3セッション(対面)《4階ラウンジ》

15:15 講習会(対面)《501》

「TEAのいろは—TEMの基本を学ぼう—」

登壇者：安田裕子

17:00 大会終了

抄録集：コメントセッション(対面&オンライン)

(5月24日 10:00-11:45)

(会場：501)

Group1 コメンテーター サトウタツヤ（立命館大学）

Commentator Tatsuya Sato (Ritsumeikan University)

対 C1-1（5月24日 10:00-10:35）

日本企業における事務職社員が「キャリア自律」に至る 心理的プロセスに関する研究

**Research on the psychological processes of office workers leading to
‘career self-reliance’ in Japanese companies**

荒木淳子（明治大学）・

番田清美（人間環境大学）

Junko ARAKI (Meiji university) ,

Kiyomi BANDA (University of Human Environments)

本研究の目的は、日本企業で働く事務職社員がキャリア自律に至るプロセスを明らかにすることである。そこで日本企業のキャリア自律した30代～40代前半の事務職社員4名を対象に、複線経路等至性アプローチ（TEA）を用いてキャリア自律に至る個人の心理的変容のプロセス及びそのプロセスを促進する要因と阻害する要因について分析を行った。分析の結果、「配属を受け入れる」、「新しい環境に飛び込む」、「自分の仕事を意味づける」、「仕事で成果を出す」といった経験を経てキャリア自律に至っていること、またそのプロセスを促進する要因には、上司や先輩、同期等の人的支援だけでなく、研修などの学習機会や若手を育成する組織風土があること、一方で経済的危機、広がりのない業務や上司の不適切なマネジメント、馴染みづらい職場の雰囲気や社内の支援が得られないことなどはキャリア自律に至るプロセスを阻害する可能性のあることが示された。

対 C1-2 抄録集 (5月24日 10:35-11:10)

「TEM 図で未来を拓くー起業支援ツールとしての活用ー」

Pioneering the future with TEM : Using them as a tool to support Start-up

小木貢 (東京大学生産技術研究所)

Mitsugu KOBOKU (The University of Tokyo)

本発表は、TEA および TEM 図の拡張性を検討するために行う。TEA が用いられる研究分野は、教育や保育、看護の領域が多いことは良く知られている。しかし“個人の人生を時間と共に描く”という趣旨からは、それらの分野にとどまらず、幅広い領域に用いられる可能性を秘めている研究手法だといえる。そこで本研究では、TEA をビジネスシーンに活用する試みとして、企業のいわゆる「ミッション・ビジョン・バリュー」を明確にするために TEM 図を用いた。経営者を HSI (歴史的構造化ご招待) し、幼少期から起業に至るまでの人生を語ってもらい、TEM 図として見返していただくことで、目先の売上に左右されない経営計画を設計することを目指した。本発表では HSI した経営者の方に共同研究者として登壇いただき、フロアとの活発な意見交換ができればと考えている。

(会場：401)

Group2 コメンテーター 安田裕子（立命館大学）

Commentator Yuko Yasuda（Ritsumeikan University）

対 C2-1 抄録集（5月24日10:00-10:35）

冠動脈疾患患者が睡眠衛生を導入し不眠の改善に取り組むプロセス

**The process of coronary artery disease patients introducing sleep hygiene
and working to improve insomnia**

平良由香利・神里みどり（沖縄県立看護大学）

Yukari TAIRA and Midori KAMIZATO（Okinawa Prefectural College of Nursing）

本研究の目的は外来通院中の不眠を有する冠動脈疾患患者が睡眠衛生教育を受け、睡眠衛生を生活に導入し、不眠が改善していくプロセスを明らかにすることである。A 氏に対し、約 6 か月に渡り 5 回の面接と 13 回の電話による睡眠衛生教育の実施とフォローアップを行った。研究協力者の言動を収集し、TEA を用いて分析した。また不眠の程度、睡眠衛生の実施状況、抑うつ・不安の程度は質問紙を用いて測定した。

A 氏は「不適切な睡眠衛生に気づいた」ことが BFP となり、不眠を改善するために習慣の改善に取り組んだ。変更でき継続できる習慣と変更・継続が困難な習慣があった。習慣の改善が困難な内容は「研究者からの定期的な連絡（OPP）」により改善に挑戦することを繰り返しながら「生活習慣を変えることで眠れる」という手応えを得ていく BFZ を経て、『睡眠衛生を生活に取り入れる』に至った。6 か月後には A 氏の不眠、睡眠衛生の状況、抑うつ・不安は改善した。

オ C2-2 抄録集 (5月24日 10:35-11:10)

精神疾患のある人をグループホームで看取る支援者の体験

Experiences of Caregivers in End-of-Life Care for Group Home Residents with Psychiatric Disabilities

田辺有理子・加藤 智哉・山田 典子 (横浜市立大学)

Yuriko Tanabe, Tomoya Kato and Noriko Yamada (Yokohama City University)

精神障害対応のグループホームでは、入居者の高齢化が進み身体機能の衰え、身体疾患の併発、それに伴う支援の課題が顕在化している。本研究の目的は、精神対応グループホームの入居者の意思決定支援および終末期における支援者の体験を明らかにすることである。精神障害のある入居者に身体疾患がみつき終末期の支援を経験した対象者に、一人につき 3 回の聞き取りを実施した。支援者の体験について、事例の経過に沿って「入居者に身体疾患がみつかる (OPP) 」から、「支援方針の協議 (BFP) 」、「看取りができた (EFP) 」を定め、TEM 図を作成した。

支援者の体験は、事例の経過に影響され、がんが見つかり看取りまで展開の早い事例から数年におよぶ事例があり、その経過とともに体験が語られた。また支援者の過去の職業経験や連携する専門職や医療福祉行政機関、事業所の方針等に影響を受けて、固有の径路を辿っていた。本研究は勇美記念財団の助成を受けた。

対 C2-3 抄録集 (5月24日 11:10-11:45)

役割から降りることを支え合える地域へ —精神障がい当事者、家族、支援者が生きづらさを語る会「いそのさんち」の実践— (精神障がい当事者に焦点を当てて)

Towards a community where people can support each other in stepping down from their roles -The practice of "Isono-sanchi," a group for people with mental illnesses, their families, and supporters to talk about the difficulties in life (Focusing on a man with mental illnesses)

佐々木旭美 (任意団体 いそのさんち)

Asami SASAKI (Isonosanchi)

「いそのさんち」では、支援関係において役割が異なる当事者、家族、支援者が参加している。精神障がい当事者 A の「参加の過程における役割意識の変化とその要因」について複線径路等至性アプローチの手法を用いて分析した。結果、役割期待や役割葛藤は、「絶望を自覚する経験」と「いそのさんちへの参加」を OPP として、BFP や SG を契機に、意識変容から行動変容が生じて役割解放が起きていた。「精神障がい当事者になった人生を肯定できる」という EFP に至り、価値変容経験から 2ndEFP が生まれていた。また SG として挙げられた「いそのさんちの場の力」は、「継続した場を育む努力」「絶望を自覚した経験からくる他者への労わり」「人としてつながる」など 5 つのカテゴリーに分類された。「いそのさんち」では場の力を活用して、役割の違いを超え、役割から降りることができる関係性と、役割の多様性を使いこなせる柔軟性が生まれていた。

(会場：4 階 AO 教室 1)

Group3 コメンテーター 中坪史典 (広島大学)

Commentator Fuminori NAKATSUBO (Hiroshima University)

オ C3-1 抄録集 (5 月 24 日 10:00-10:35)

**知的障害がある生徒の現場実習を通じた進路決定プロセスから検討する教育的支援のあり方
Examining the Ideal Educational Support for Students with Intellectual
Disabilities: Insights from Career Decision-Making through Workplace
Training**

今井彩 (明星大学通信制大学院)

Aya IMAI (Correspondence course graduate school of Meisei University)

知的障害を主とする特別支援学校においては、中学部や高等部の生徒が、商店や企業、作業所などの福祉施設で一定期間働く産業現場等における実習（以下、現場実習）を行っている。このような就業体験を計画的に実行し、生徒が自己の進路に向けて具体的な判断ができるようにすることは、生徒の主体的な進路選択と社会参加を可能にするとされている。本研究では、通常校から特別支援学校高等部へ入学し、卒業前に就職内定を決めた軽度知的障害のある生徒 4 名を研究対象に TEM 図を作成し、現場実習を通じた進路決定までのプロセスを描くことで、生徒の主体的な進路選択と社会参加を促す効果的な支援方法を検討した。その結果、生徒のキャリア形成段階に応じた学習機会を設定していくこと、実習先の職場環境や職務との適合性から生徒が自己分析できるようサポートしていくこと、そして学校生活の中で目標をもって行動できるような働き掛けをしていくことが考えられた。

対 C3-2 抄録集 (5月24日 10:35-11:10)

道徳教育を通して児童が自己の生き方を明らかにする過程の考察—学期末の振り返りにおける発表内容を中心に—

A Study on the Process by Which Children Clarify Their Own Way of Life Through Moral Education: Focusing on Their Presentations During End-of-Term Reflections

浅部航太 (東京学芸大学)

Kota ASABU (Tokyo Gakugei University)

「自己の生き方を考える」活動は、道徳教育とその要となる道徳科の中核となる学習活動である。しかし、児童がどのような過程で自己の生き方を明らかにしたかを示した研究は管見の限りない。そこで、道徳科の「学期末の振り返り」における約2年分の発表データを、TEAを用いて考察した。そして、1) 児童がどのような過程で自己の生き方を明らかにしたか、2) 自己の生き方を明らかにした児童の共通点は何か、3) どのような要素が自己の生き方に影響を与えたかを明らかにしようと試みた。

小学校高学年4名のデータをTEM図に統合した結果、①現代的な課題を扱う学習について学期末に振り返る、②自分の弱さや無力さに気づく、③大事な人から感謝される、④自分にできることを考えることが共通点として見出された。また、TLMG図の分析から、特に【弱さの自覚】と【自分にできることを考える】経験が、自己の生き方に影響を与える要素であることが示唆された。

オ C3-3 抄録集 (5月24日 11:10-11:45)

中学受験が子どもの心理に与える影響 —大学生の回顧証言から—

The impact of junior high school entrance examinations on the psychological state of children. With the recollections of university students.

高梨輝美 (鎌倉女子大学大学院 児童学研究科児童学専攻 修士課程)・

伊藤嘉奈子 (鎌倉女子大学)

Terumi TAKANASHI (Kamakura Women's University Graduate School Course of
Child Studies (Master's Course)),
Kanako ITO (Kamakura Women's University)

近年、首都圏では中学受験熱が高まっていると言われる。そうしたなか、中学受験のプロセスにおいて、親子の信頼関係が崩れる事態や教育虐待が疑われる事例なども新聞報道され、中学受験にはリスクが潜むとの指摘もある。だが現状、中学受験に際して子どもがストレスフルな環境におかれることの心理的影響や、家族関係、学習の進め方など多くの検討課題に関する心理学研究、特に質的研究はほとんどみられない。そこで本研究は、中学受験のプロセスが、受験当事者である子どもに与える心理的影響を探索的に検討することを目的とする。中学受験を経験した大学生 5 名へインタビューを行い、TEA で分析する。TEM 図は、中学受験準備を始めた地点から中学受験をした地点（等至点）までを、縦軸に本人の受験への意欲の高低を設定し描く。分析結果から、中学受験の経験が子どもの健全な心の発達を担保するものであるために、どのような視点からの検討が必要かを考察する。

抄録集：特別講演(対面&オンライン)（5月24日10:00-11:45）

（会場：5階 講堂）

TEA をもちいた交差型混合研究法デザイン

- MM-TEA の可能性

Intersected mixed methods design using

TEA – Potential for MM-TEA

登壇者：廣瀬眞理子（関西学院大学）

John W. Creswell PhD（ミシガン大学）

Keynote Speaker

Mariko H. Creswell, PhD(Kwansei Gakuin University, Japan)

John W. Creswell PhD (University of Michigan, USA)



混合研究法デザイン（mixed methods design）は、混合型研究における主要な構成要素の1つであり、これまで長年にわたり広範に議論され、今もなお進化を続けている。本講演では、混合型研究の質的工程に基本的な質的分析ではなく、厳密な質的研究法を組み込むデザインモデルである「交差型混合研究法デザイン（intersected mixed methods design）」を紹介する。質的研究法には、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィ、ナラティブリサーチ、現象学的研究などがあり、いずれも方法論（methodology）として、哲学的前提または世界観から、研究の最終的な解釈に至るまでの特徴的な一連のプロセスを有する。研究者は、自らの研究設問に応答する最適な質的研究法を検討して、混合型研究における質的工程に採用する。日本で誕生した複線径路等至性アプローチも、哲学的前提からデータ分析、解釈にいたるまでの一連の手順を展開しており、交差型混合法デザインにおいて選択する質的研究法の一つとして有望である。ここではTEAの研究法としての世界観、データ収集、データ分析、妥当性、文章構成の5つの構成要素を説明し、TEAのもつ強みを捉えたMM-TEAの可能性について考えていく。

引用文献

Hirose, M., & Creswell, J. W. (2023). Applying core quality criteria of mixed methods research to an empirical study. *Journal of Mixed Methods Research*, 17(1), 12-28.

Hirose, M., & Creswell, J. W. (under review). Intersecting Mixed Methods Research:

Using the Trajectory Equifinality Approach as a Qualitative Methodology in Mixed Methods Research. *Annals of Mixed Methods Research*.

廣瀬眞理子 & クレスウェル J. W. (2022) 混合研究法 (MMR) による家族援助介入 実践. 安田裕子・サトウタツヤ (編著) *TEA* による対人援助プロセスと分の記述 : 保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究. 新曜社. pp202-233.

Creswell, J. W., & Báez, J. C. (2020). *30 Essential Skills for Qualitative Researcher* (2nd ed.). Sage. (ジョン・W・クレスウェル, ジョアンナ・クレスウェル・バイアス, 廣瀬眞理子 (訳) (2022) . 質的研究をはじめのための 30 の基礎スキル : おさえておきたい実践の手引き. 新曜社.

八 抄録集：優秀論文賞表彰・発表（5月24日 13：15-15：00）

（会場：5 階 講堂）

Commendation ceremony for Best Paper Award & Presentation

司会：安田裕子（立命館大学）・森直久（札幌学院大学）

Moderator: Yuko Yasuda (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University) , Naohisa Mori (Sapporo Gakuin University)

豊田香・卒田卓也

TOYODA Kaori, SOTTA Takuya

第 1 巻第 1 号「[単方向 TEA]から[双方向 TEA]を開発する試み—不登校経験家族を事例として」
Vol. 1, No. 1. “Attempt to Develop a Bidirectional TEA from a Unidirectional TEA:
Case Study on a Family who Experienced Truancy”

中野祥子

NAKANO Sachiko

第 1 巻第 1 号「在日ムスリム留学生のヒジャーブ着脱行為をめぐる価値の変容過程—TEA による 3 名の事例分析」
Vol. 1, No. 1. “The Change in Values Surrounding Wearing the Hijab: A Case Study of Three Muslim Students in Japan Using the Trajectory Equifinality Approach”

白崎知美

SHIRASAKI Tomomi

第 2 巻第 1 号「小児医療における治療拒否の自己決定に関わる家族や医療者の苦悩や葛藤と相互理解—TEM 図と TLMG による分析を手掛かりに」
Vol. 2, No. 1. “Conflicts and Mutual Understanding among Family and Healthcare Providers Regarding Self-Determination of Treatment Refusal in Pediatric Care: Insights from Trajectory Equifinality Modeling (TEM) and Three Layers Model of Genesis (TLMG)”

八 抄録集：大会シンポジウム（5月24日（土）13：30－15：30）

（会場：401 教室）

「TEA と LLM（大規模言語モデル）との出会い」

“Encounter with TEA and LLMs (large language models) ”

企画・司会・話題提供：杉山滉平（立命館大学）

企画・話題提供：中田友貴（立命館大学）

話題提供：遠藤純音（奈良先端科学技術大学院大学）

話題提供：北村尊義（香川大学）

Organizer / Moderator / Presenter : Kohei Sugiyama (Ritsumeikan University, R-GIRO)

Organizer /Presenter : Yuki Inoue Nakata(Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology)

Presenter : Sunao Endo(Nara Institute of Science and Technology (NAIST), Graduate School of Science and Technology)

Presenter : Takayoshi Kitamura(Kagawa University)

シンポジウム概要

近年、生成 AI や LLM（大規模言語モデル）の急速な発展と社会的実装が進む中で、質的研究分野にも活用可能性が見出されている。人間の深い洞察や対話的な理解が中心とされてきた質的探究においても、LLM の持つテキスト生成能力や分析支援の力が注目され、新しい研究プロセスの可能性を広げる糸口となるかもしれない。TEA のような多様な道筋と目的地を描き出すアプローチにおいても、LLM との出会いは、新たな理論的・方法論的な拡張の可能性をもたらすだろう。

本シンポジウムでは、LLM を用いた TEA 研究を行う 4 名の登壇者による研究発表と参加者とのディスカッションを通じて、TEA と LLM との可能性を探究する。まず杉山氏が自身の研究の紹介と TEA に関するシンポジウム全体の問いを示す。そして中田氏は、近年の質的研究の中で LLM が果たしうる役割や課題について、研究レビューを通じて報告を行う。遠藤氏は LLM を用いた TEM 図の自動作成に関する試みを報告し、質的データの可視化に AI がどのように関与できるかを示す。最後に北村氏は、LLM を用いたチャットボットによるテキストカウンセリングの要件について紹介する。

報告終了後には、登壇者と参加者との質疑応答を行い、研究や実践の現場の視点や懸念、期待を共有しながら発展的な議論を行う予定である。

※企画協力：立命館大学 R-GIRO「記号創発システム科学創成：実世界人工知能と次世代共生
社会の学術融合研究拠点」

八 抄録集：大会特別シンポジウム（5月24日 15：30-17：00）

（会場：5階 講堂）

(Venue:the fifth floor auditorium)

「ホーム」と「居場所」の文化心理学：発達主体による境界形成の探究

The Cultural Psychology of 'Home' and 'Ibasho': Exploring

Boundary-Making by Developing Subjects

土元哲平（企画・司会・話題提供）（立命館大学）

マルク・アントワヌ・カンピル（話題提供）（サレルノ大学）

神崎真実（話題提供）（京都教育大学）

小澤 伊久美（話題提供）（国際基督教大学）

ルカ・タテオ（指定討論）（オスロ大学）

サトウタツヤ（企画・指定討論）（立命館大学）

Teppei Tsuchimoto (Organizer / Moderator / Presenter)(Ritsumeikan University)

Marc Antoine Campill (Presenter) (University of Salerno)

Mami Kanzaki (Presenter)(Kyoto University of Education)

Ikumi Ozawa (Presenter)(International Christian University)

Luca Tateo (Discussant)(University of Oslo)

Tatsuya Sato (Organizer / Discussant)(Ritsumeikan University)

本シンポジウムでは、人が「いる」こと、「存在する」ことの意味を捉える上で重要な概念として、「居場所」と「ホーム（home）」を取り上げる。前者の「居場所」は、特定の空間や社会といった全体性に焦点を当てながら、個々の行為者がその場所に「い続けることができる」持続性や、「ここ」という場所の独自性、「いる」ことにともなう安心感を強調する。日本においては、しばしば不登校やひきこもり理解などの文脈で用いられ、外的世界と自己の境界設定が明確になされるという点が特徴的である。後者の「ホーム」は「松山は私のホームだ」「TEA 学会は私のホームだ」というように、個々人の視点に基づき、特定の空間を「内側のもの」として感じる主観的な感覚を示す。ここでは、外的世界との境界が明確に引かれず、むしろ主体が周囲の世界と融合し、感情移入（Einfühlung; feeling into)していく側面が強調される。

「居場所」と「ホーム」は、境界の明確さや内的なものとの関わりという点で対照的でありながら、物理的

な現実を超えて、アイデンティティや意味づけが機能することを理解するための相補的な視座を提供する。本シンポジウムでは、これらの概念をめぐる理論的・経験的（empirical）な考察を通じて、移民、引越、歩くことや可動性（mobility）、被災、ツーリズム、庭、さらには宇宙や航海といった未知の空間への進出など、私たちが「ここにいる」ことの意味づけの創発過程について、文化心理学の視座からラディカルに問うための契機としたい。

（※本シンポジウムは英語で行われる。）

In this symposium, we will focus on two key concepts for understanding the meaning of being or existing - namely, "*Ibasho*" (居場所) and "home". The former, *Ibasho*, emphasises the sense of continuity that allows individual actors to "remain" in a particular social space as a whole, the uniqueness of "here", and the sense of security that accompanies simply being present. In Japan, *Ibasho* is often used in contexts such as school refusal or hikikomori (social withdrawal), where the boundaries that define one's position in the outside world are clearly drawn. The latter term, "home", on the other hand, refers to a subjective sense of perceiving a particular place as 'inside' oneself, based on a subject's perspective - for example, "Matsuyama is my home" or "the TEA conference is my home". Rather than drawing firm boundaries with the outside world, the focus here is on how the subject is trans-acting with, or feeling into (*Einfühlung*) the surrounding environment.

While *ibasho* and home contrast in their clarity of boundaries and their relationship to what is considered internal, they both operate in the meta-physical realm and offer complementary ways of understanding how identity or meaning-making is constituted. Through theoretical and empirical investigations of these concepts, this symposium will provide an opportunity to radically explore, from the perspective of cultural psychology, the processes that generate the meaning of our "being here" in various contexts - from immigration, relocation, walking and mobility, to disaster experiences, tourism, gardens, and even ventures into the unknown such as space and maritime exploration.

(Note: This symposium will be held in English.)

オ 抄録集：招待講演（5月24日 15：30-17：00）

（会場：501 教室）

TEAを用いた教育臨床における葛藤の可視化

How to visualize conflict processes in educational settings by applying TEA.

講師：川上康則（杉並区立済美養護学校）

Yasunori KAWAKAMI（Suginami City Seibi school for special education needs）

指定討論：安田裕子（立命館大学）

Discussant：Yuko Yasuda（Ritsumeikan University）

司会：三田地真実（教育ファシリテーション研究所・法政大学教育開発支援機構）

Moderator: Mami Mitachi（Educational Facilitation Investigation Laboratory・Hosei University）



教育・保育・療育など子どもと関わる臨床の仕事は「感情労働」の職場と言われる。相手の感情に大きく働きかけるといふ意味合いと同時に、その職業の従事者もまた感情を大きく揺さぶられるという側面が強い。

教育の現場では、その瞬間の即時的な最善の判断と選択が求められる。そして、その判断は迷いの連続でもある。「今日のあの場面の関わりは本当に合っていたのだろうか」「もしかしたら別の選択肢もあったかもしれない」「なぜ、あの場面でこの一言を言ってしまったのだろうか」・・・そんな思いが常に付きまとう。

このような指導者側の葛藤のプロセスを表現する際に、図を用いながら整理していく TEA（複線径路等至性アプローチ）はとても有用であり、現場における実践的な研究の深まりにつなげられる可能性を実感している。

今回は、実践者・研究者自身が自己を分析する「自己 TEM 図」の作成を通して、以下の 3 点に着目した実践について紹介する。

- （１）オリジナルの人生を俯瞰する
- （２）混沌とした指導場面を整理しながら選択肢を可視化し検証する
- （３）現場で出会う様々な事象に意味を見出し「この瞬間」を捉える視点を養う

引用文献・関連文献

・安田裕子・サトウタツヤ編著、TEA による対人援助プロセスと分岐の記述—保育、看護、臨床・障

害分野の実践的研究、誠信書房、2022 年

・サトウタツヤ・安田裕子監修、上川多恵子・宮下太陽・伊東道子・小澤伊久美編、カタログT E A
(複線径路等至性アプローチ) 図で響きあう、新曜社、2023 年

八 抄録集：大会記念講演(Keynote speech)

(5月25日 10:00-12:00)

(会場：5階 講堂)

(Venue:the fifth floor auditorium)

HOW TO STUDY PSYCHOLOGICAL ATMOSPHERES?

心理的雰囲気の研究するには？

Keynote Speaker :Jaan Valsiner (Aalborg University)

Interpreter : Tatsuya Sato (Ritsumeikan University)

登壇者：ヤーン・ヴァルシナー（オールボー大学）

通訳・解説：サトウタツヤ（立命館大学）



Psychological atmospheres of any place where human beings join together is of central relevance to psychological science. It is a *Ganzheit*-phenomenon (wholistic field) the study of which requires new theoretical perspectives and new methods. The presentation will outline some possibilities in that direction.

人間が共に集まるあらゆる場所の心理的雰囲気は、心理学にとって中心的な重要性を持つ。これはガンツハイト現象（全体的な場）であり、その研究には新しい理論的視点と新しい方法論が必要である。この発表では、こうした方向性をもついくつかの可能性について概説する。

抄録集 一般口頭発表 1 (5月25日 10:00-11:50)

(会場: 401 教室)

座長 中越章乃 (東海大学)

Ayano NAKAGOSHI (Tokai University)

対 O1-1 10:00-10:20

「ケアの倫理」における関係的自己の生成過程について ―知的障害のある子どもの母親へのインタビュー調査から―

The Generating Process of the Relational Self in "Ethics of Care": From an interview with mothers of children with intellectual disabilities

鈴木ちひろ (大阪府内特別支援学校非常勤講師)

Suzuki Chihiro (Special Needs Schools in Osaka Prefecture)

本研究は、ケアの倫理において重要な概念とされる「関係的自己」の生成過程について、知的障害のある子どもの母親へのインタビュー調査により、その促進・阻害要因を明らかにすることが目的である。「豊かなケアのネットワークにつながっている状態」を EFP として、「関係的自己」の生成過程を TLMG で描き、促進・阻害要因のせめぎ合いの有様を分析することで、ケアの「関係性の質」そのものに対する「潜在能力」を平等にするために必要な資源や支援のあり方を明らかにする。昨年度の本学会でのポスター発表の内容から、文献レビューにより、関係的自己に関する理論的な理解を深めた。また、前回の発表で重要性を指摘された、EFP 及び P-EFP に至る経路における SD と SG のせめぎ合いのポイントについて、トランスビューを行い、TLMG を作成した。

対 O1-2 10:20-10:40

精神障害者のターミナルケアにおける支援課題

Issues in Terminal Care for the Mentally Disabled

中越章乃（東海大学）

Ayano NAKAGOSHI (Tokai University)

精神障害者の終末期ケアについては、精神症状への対応の難しさや誤解によりケアの多くを精神科医療機関が担わざるを得ない現状がある。精神科医療機関のスタッフにとっては、経験の少ない身体疾患のケアへの不安やジレンマが大きく、ケアに自責感や後悔を抱きやすい等の課題があることが指摘されている。本研究では、精神障害者の終末期ケアにおける関係機関連携の課題抽出を目的とした。支援経験のある看護師やソーシャルワーカーを調査対象として半構造化面接を実施し、複線径路・等至性モデルを用いて分析した。調査対象者が支援をおこなった事例のうち、最も印象的な1事例について、所属機関での役割や業務などのほか、連携した機関、必要と思われた社会資源、関わりの経過等に関して回答を得た。身体疾患の発覚によって選択肢や関わる機関が減ることによる精神科病院の孤立や経験の蓄積の困難、情報不足などの課題が見られた。

対 O1-3 10:40-11:00

看護学生のネガティブ・ケイパビリティに着目した 実習指導者とのコミュニケーション経験 ～複線径路等至性モデルを用いた学習の視点から～

Examining Communication Experiences with Practice Instructors

Focusing on Nursing Students' Negative Capability: A Perspective on Learning Using the Trajectory Equifinality Model

小西 奈美（明治国際医療大学）・更田新太郎（京都橘大学）

Nami KONISHI (Meiji University of Integrative Medicine) ,
Shintaro FUKETA (Kyoto Tachibana University)

看護学生のネガティブ・ケイパビリティに着目し、臨床実習において指導者とのコミュニケーション時に得た困難な経験を、Trajectory Equifinality Model（複線径路・等至性モデル）を用いて学習の視点から明らかにすることを目的に検討した。学年ごとにフォーカス・グループインタビュー（3年生5名、4年生4名）を行い合計9名のデータを検討した。その結果、看護学生が指導者とのコミュニケーション時に得た経験には、1）報告する看護師がわからない時期、2）報告のタイミングを見計らう時期、3）実施許可を得る時期の3つの時期があった。各時期において、看護学生は葛藤を抱きながらも自身の感情や思考に気づいて困難な状況に対処し、等至点として「報告すべき看護師の所在を把握」「報告するタイミングは指導者の看護業務と業務の隙間」「計画を実施するために教員ではなく指導者の許可が必要」という教訓を得ていた。

オ 01-4 11:00-11:20

**小学校長の教職人生と信念の形成過程 –TEA とライフストーリー 研究による検討を通じて–
The Teaching Life and Belief Formation Process of an Elementary School
Principal : Through an Examination of TEA and Life Stories**

五十嵐 誓 (尚絅学院大学)

Sei IGARASHI (Shokeigakuin University)

本発表は、小学校長の教職人生を幼少期から辿り、その傾向性を把握するとともに、校長の学校ビジョンにつながる信念の形成過程について明らかにすることを目的とする。このため、二つの質的研究を組み合わせた手法を用いることとする。TEA（複線径路等至性アプローチ）は、人生を「径路」と想定し、TEM 図により教職人生を一覧できること、また複数の教職人生を統合し一定の傾向性を把握できること、さらにはTLMG（発生の三層モデル）による信念の形成過程を分析できる研究方法上の特長を有する。一方、ライフストーリー研究は、話し手と聞き手の対話的な過程をもとに、話し手の人生や経験の意味を捉える手法であり、生活上の実感を得やすく教職人生の具体的な把握のしやすさに特長を有する手法である。時間の流れを意識し、主観的観点より経験の意味づけや人生の様相を捉えようとする点において親和性を持つ二つの手法により、上記の目的に迫りたい。

質疑応答 11:20-11:50

ポスター発表 1 (5月25日 10:00-11:30)

(会場：4 階 ラウンジ)

対 P1-1 臨時的任用教員における教師継続の葛藤と意思決定の過程：教師の職業的アイデンティティ形成に注目して

The Struggles and Decision-Making Process of Temporarily Appointed Teachers in Continuing Their Teaching Career: Focusing on the Formation of Teachers' Professional Identity

南 雅則 (びわこ学院大学)

Masanori MINAMI (Biwako Gakuin University)

本研究は、教職経験 1 年目の臨時的任用教員に対し、勤務中での出来事や経験、それらについての自分の受け止め方や感情などについてインタビューを行い、複線経路等至性アプローチ (TEA) を用いて教師継続の葛藤と意思決定の過程を教師の職業的アイデンティティ形成から検討したものである。その結果、臨時的任用教員は、学級運営や児童・保護者対応に不安を抱えつつ、責任感から問題を一人で解決しようとして心身の不調や自己肯定感の低下を経験し教師を続けるか葛藤するが、関係改善や学級経営の手応えを得る中で教職への適性を再評価し、最終的に教職を自身のキャリアとして位置づけるようになった。臨時的任用教員の職業的アイデンティティは実践経験や支援を通じて促進され、こうした経験が教員採用試験受験の動機となり、教師継続の意思決定に影響することが明らかとなった。

**対 P1-2 対話的自己論の TEA への導入：海外移住者の内部ポジションにおける複数の自己
(私 II) 間の葛藤を事例として**

**Incorporating dialogical self theory into TEA : A case study of the
conflict between multiple selves (Self II) in the internal position of a
Japanese migrant.**

石盛真徳（追手門学院大学）・

中尾元（追手門学院大学経営学部）・

イゴール・デ・アウメイダ（京都大学人と社会の未来研究院）

Masanori ISHIMORI (Otemon Gakuin University) ,

Gen NAKAO (Faculty of management, Otemon Gakuin University) ,

Igor DE ALMEIDA (Institute for the Future of Humanities and Societies, Kyoto
University)

TEA では個人の変容を捉える自己モデルとして、発生の三層モデル（TLMG）が組み込まれている（サトウ, 2015）。TLMG では、個人活動レベル、記号レベル、および信念・価値観レベルの三層構造の導入により、記号の内化と外化という記号論的な自己変容の把握が可能となる。しかしそういった記号論的アプローチでは、溝上(2013)の指摘するような他者との関係性の中で形成された対照的な 2 つ以上の Me が 1 人の同じ自己の中でぶつかりあい、主体（I）がそれを調整したり解決したりして、自己を形成していくプロセスについて検討することは困難である。そこで本研究では、中国出身で日本に移住し日本国籍を取得した女性の事例を検討し、対話的自己論の自己モデルによって内部ポジションにおける複数の自己（私 II）間の葛藤、調整、解決が詳細に検討可能となることを示す。そしてその上で、対話的自己論の自己モデルを TEA の自己モデルとして導入することの有効性について検討する。

対 P1-3 脳卒中患者の Self-awareness の変化が病前作業の再開可否の意思決定に与える影響

Effects of Changes in Self-awareness in Stroke Patients on Decision-Making to resume activity

川田 佳央・宮本礼子（東京都立大学）

Yoshio KAWATA, Reiko MIYAMOTO (Tokyo Metropolitan University)

Self-awareness は、自身の障害や能力、社会の中の自己を認識する能力であり、脳卒中患者の作業療法効果への影響も報告されている。本研究では、脳卒中患者の Self-awareness の変化が病前作業の再開可否の意思決定に与える影響を、TEA を用いて明らかにすることを目的とした。対象者は 60 代の会社員男性。脳卒中後に軽度失語があり、回復期リハビリテーション病棟に入院。分岐点を「脳卒中発症」、等至点を「病前作業の再開の検討」として面接を 1 回実施した。分析の結果、男性は職員との会話を通し症状の出現や改善に関する体験的気づきを得た。一方、入院生活という限られた環境では、退院後の生活上の問題を推測する予測的気づきまでは得られていなかった。そのため、過去の生活とリハビリでの成功体験、家族の協力、仕事内容の調整という社会的助勢が働き、退院後も治療を継続し職場復帰することを計画されていることがわかった。

対 P1-4 大規模言語モデルを活用した複線径路等至性モデリングのための図生成システムの開発
Development of a Diagram Generation System for Trajectory
Equifinality Modeling with Large Language Models

遠藤純音（立命館大学 情報理工学部）・長谷川 翔一（立命館大学大学院 情報理工学研究科）・中田 友貴（神戸大学大学院 人文学研究科）・杉山 滉平（立命館大学大学院 理工学研究科）・谷口 彰（立命館大学 情報理工学部）・上川 多恵子（立命館大学 OIC 総合研究機構）・安田 裕子（立命館大学 総合心理学部）・谷口 忠大（京都大学大学院 情報学研究科, 立命館大学 総合科学技術研究機構）

Sunao Endo(College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University), Shoichi Hasegawa(Graduate School of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University),Yuki Inoue Nakata(Graduate School of Humanities and Faculty of Letters, Kobe University),Kohei Sugiyama (Graduate School of Science and Engineering, Ritsumeikan University), AkiraTaniguchi(College of Information Science and Engineering, Ritsumeikan University),Taeko Kamikawa(Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University),Yuko Yasuda(College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University),Tadahiro Taniguchi (Graduate School of Informatics, Kyoto University,Research Organization of Science and Technology, Ritsumeikan University)

TEM 図は従来の質的研究支援ソフトでは作成できず、手作業で作成するのが現状である。これに対し、本研究はインタビューのテキストデータから自動で TEM 図を作成できるシステムを開発し、作成プロセスの効率化を目指す。提案システムでは、大規模言語モデル（LLM）を活用してインタビューデータの文字起こしとデータの整理を行い、TEM 図の図面ファイルを自動生成する。生成された図面ファイルを作図ソフトウェアに取り込むことで、TEM 図の作成を実現する。本システムの利便性を調査するために、TEM 初学者と熟達者に試用してもらい、操作性や有効性について検討を行った。その結果、システムの操作が容易であること、図の作成時間が短縮されること、機能面の有用性などが示唆された。一方で、LLM の出力は TEM ユーザーが求める水準には達していなかった。今後は、調査で得られたフィードバックをもとにシステムを改良し、WEB サービスとしてリリースすることで、実用化を目指す。

対 P1-5 博士論文の作成と指導をめぐる「鼎話的オートエスノグラフィー」の試み：審査合格までのプロセスに着目して

“A Trialogical Autoethnographic Approach” to Writing and Supervising Doctoral Dissertations: Focusing on the Process Leading to Defense Approval

加藤 望（名古屋学芸大学）・

濱名 潔（武庫愛の園幼稚園）・

中坪史典（広島大学大学院）

Nozomi KATO (Nagoya University of Arts and Sciences) ,

Kiyoshi HAMANA (Ainosono Kindergarten) ,

Fuminori NAKATSUBO (Hiroshima University)

本研究の目的は二つある。一つは、博士課程における指導をめぐる、指導教員と大学院生のやりとりの過程を、自らの経験に基づいて明らかにすることである。これにより、博士論文作成をめぐる効果的な指導方法を検討することができる。二つ目は、「鼎話的オートエスノグラフィー」という新しい研究手法を試みることである。研究のデザインとして、質的研究の方法としてのオートエスノグラフィーを採用する。データ収集の方法は、半構造化インタビューであり、研究責任者と共同研究者の三名を研究参加者とし、鼎談によるグループインタビューを実施する。分析方法は、複線径路等至性モデル（TEM）の中でも、二者関係の構築過程を明らかにするために適しているという Parallel-TEM を使用する。

**対 P1-6 アトピー性皮膚炎及びアレルギー性結膜疾患を有する児童生徒の教育的配慮の検討
—対話による Auto-TEM を用いた分析—**

**Educational accommodation for Students with Atopic Dermatitis and
Allergic Conjunctival Diseases -Analysis using Auto-TEM with dialogue-**

戸田敦大（広島大学人間社会科学研究科）

Atsuhiro TODA (Hiroshima University Graduate School of Humanities and
Social Sciences)

AD を有する児童生徒が必要とする教育的配慮として、先行研究では精神面と学習面の両方で支援を必要としていることが明らかとなっている(深澤・山本, 2006; 津村・渡辺・山田, 2009)。AD の眼合併症にはアレルギー性結膜疾患（ACD）があり、ACD は重症化することで円錐角膜、白内障、網膜剥離といった眼の合併症を来しやすく(日本学校保健会, 2008,2022)、学習に影響を及ぼすことも考えられる。本研究では、AD 及び ACD 当事者である筆者自身の学校生活における疾患理解とセルフケア獲得のプロセスを、対話や保護者へのインタビューをもとに Auto-TEM を用いて明らかにした。その結果、筆者の疾患理解は保護者から受け取る情報や症状の状態とともに変化していること、セルフケアについては認知発達段階や周囲の環境の変化、症状の状態が関連していることが明らかとなった。また先行研究ではあまり見られなかった、環境の変化や疾患理解が進むことで却ってセルフケアの質が下がる過程が見られた。

対 P1-7 あるボランティアがより積極的に地域日本語教育に関わるプロセス -支援の担い手を増やすための一考察-

A Process of a Volunteer Becoming More Enthusiastically Involved in Community-Based Japanese Language Class: An Exploration of Ways to Increase Volunteers

古田梨乃（新潟大学）・今城淳（フリーランス）

Rino FURUTA (Niigata University) ,Jun IMAKI (freelance)

多文化共生の拠点となっている地域日本語教育はその担い手の新規参入・定着に課題を抱えている。そこで、地域日本語教育の発展のために活動する選択をしている日本語学習支援ボランティアをご招待し、活動をするに至るプロセスについて聞き取り、PAC 分析を併用した TEA の手法を用いて分析した。その結果、地域日本語教育への新規参入・定着を促進するために、①「やさしい日本語」で支援ができることを周知すること、②各自治体内で外国人住民を支援する協力体制を築くこと、③ボランティア支援者同士が協働的関係を築くこと、④外国人住民が参加したいと思える地域日本語教室であること、⑤多様な教室が存在し、支援者も外国人住民も選択可能であることの必要性が示唆された。また、日本語教師は 2024 年より国家資格化され、注目を集めているが、地域日本語教育にボランティアとして関わることが日本語教師の資格取得の動機となる可能性があることもわかった。

対 P1-8 在日日系ペルー人二世世代のアイデンティティの形成プロセス－複線径路等至性アプローチからの検討－

The Identity Formation Process of Second-Generation Japanese Peruvians (Nikkei) in Japan: An Examination Using the Trajectory Equifinality Approach

貞安 薫（お茶の水女子大学大学院）

Kaoru SADAYASU (Ochanomizu University)

近年のグローバル化の進展により人々の文化間移動が活発化している。その中で、社会化の途上で文化間移動を経験する子どもたちは言語や異文化環境におけるストレス、アイデンティティの揺らぎ等の多くの問題を抱えるとされる。一方、1990 年の入管法改定を境に始まった日系南米人の来日から 30 年以上が経った今日、彼らの経験から得られる示唆も多い。そこで本研究では、小学校就学期に親と共に来日し、現在日本で就労する日系ペルー人 3 名のライフストーリーを、複線径路等至性アプローチを分析方法として用いてアイデンティティの形成過程を検討した。その結果、彼らが「日本」と「ペルー」の 2 つの文化の間で葛藤や孤独感を抱きながら日本社会で生活する中で、次第に多元的で柔軟なアイデンティティを形成してきたことが確認できた。本結果は、ますます増加が予想される外国につながる子どもたちへの理解の一助となるものとして貢献できると思われる。

対 P1-9 看護指導者が、発達障害のある看護師を指導した際に抱いた違和感の語り

A nursing instructor talks about the discomfort she felt when teaching nurses with developmental disabilities.

中西 愛（関西医科大学（立命館大学人間科学研究科））

Ai NAKANISHI（Kansai Medical University（Ritsumeikan University Graduate School of Human Sciences））

近年、発達障害のある看護師の増加が報告されているが、看護職として求められる資質の問題や患者の安全が確保できない等が背景となり、約8割の施設が採用に否定的である（戸部,伊東,2020）。本研究では看護指導者が発達障害のある看護師を指導した際に抱いた違和感の語りを複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling:以下 TEM）で描きだした。A指導者の語りは、第Ⅰ期【対象理解の困惑期】から第Ⅱ期【指導方法の模索期】第Ⅲ期【指導方法の考案期】第Ⅳ期【対象と環境との齟齬露呈期】に分けられ、A指導者の最初の違和感はB看護師と《BFP①コミュニケーションが図りにくと感じ(る)》たことであった。コミュニケーション成立のための責任は双方で分かち合うもの(中村, 2022)であり、最初に抱いた違和感の捉え方と対処が重要な分岐点であったと思われる。しかし違和感は正確に捉えることは難しいため、対処できず見過ごされたことがその後の指導に影響を及ぼしたと考える。

対 P1-10 成長ホルモン分泌不全症当事者の病気受容プロセス

The Process of Accepting Sickness in Individuals with Growth Hormone Deficiency

杉本有（九州大学）

Yu Sugimoto（Kyusyu University）

背景・研究目的 GHDは小児期から思春期にかけ自己注射GH療法を受けるが、評価が支援者主体となり、当事者の心理的受容過程は十分に検討されていない。本研究は、成人期のGHD当事者の語りから病気経験と課題を明らかにし、受容過程を描くことで支援策向上を目指す。方法 自己注射GH療法経験の成人女性2名にインタビューを実施し、逐語録を複線径路等至性アプローチ（TEA）で分析した。結果と考察 TEMにより【受診】【治療開始】【慣れ】【効果実感】【治療終了】【身長納得】の必須通過点が抽出された。各段階で社会的助勢や方向づけが働き、達成感やポジティブ体験が受容促進に寄与することが示された。医療従事者との定期連絡や学校での情報共有が治療継続に重要である。結論 本研究は、GHD当事者の受容プロセスを質的に検討し、治療継続の動機維持と学校現場での個別支援の必要性を示唆している。

対 P1-11 特別な支援を要する幼児の園での包摂過程に関する縦断的研究

Longitudinal study of the inclusion process for children with special needs in kindergartens

吉川和幸（国立特別支援教育総合研究所）・

上村毅（ほしおきガーデン星の子幼稚園）

Kazuyuki YOSHIKAWA (National Institute of Special Needs Education) ,

Takeshi UEMURA (Hoshioki Garden, Hoshinoko Kindergarten)

本研究では、幼保連携型認定こども園に在籍する、特別な支援を要する幼児 1 名に対する、入園から卒園までの 3 年間の包摂の過程を、複線径路等至性アプローチ(TEA)により、縦断的に描き出すことを試みた。担任保育者に対するインタビュー、保育記録、参与観察により得たデータをもとに作成した TEM 図からは、主に以下の点が示された。①対象児の良さや強みが理解され、集団に無理に合わせることなく、興味、関心を基にした支援が構想されていたこと。②子どもが互いに納得できる関わりや距離感を、子ども同士で探りながら、共に遊び、楽しむことを経験する機会が重視されていたこと。③集団の関係性での育ちの過程で、保育者による直接的支援は年を経るごとに後景化していたこと。④副担任等のサポートが、集団での対象児の無理のない自己発揮や保護者との関係作りに繋がっていたこと。

八 抄録集：実行委員企画シンポジウム（5月25日13：00-15：00）

（会場：5階 講堂）

キャリアと記号：非可逆的時間のなかで径路を描く意味

Career and Symbol: The Significance of Drawing a Trajectory in Irreversible Time

話題提供者

「TEA」とアジアの文化的・身体的越境

Trajectory Equifinality Approach and Cultural-Bodily Border Crossing in Asia

市川章子（国立国語研究所）

Akiko Ichikawa (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

キャリアの分岐点と移境態

Bifurcation point of career and Liminality

宮下太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）

Taiyo Miyashita (The Japan Research Institute, Limited. The Institute for Societal Values in Future Generations)

教育改善活動の「支援者」の役割とキャリア形成

Role and Career Development of Educational Improvement Activity Supporters

石田百合子（職業能力開発総合大学校）

Yuriko Ishida (Polytechnic University)

キャリアとしての TEA

TEA as a Career

小山多三代（立命館大学大学院人間科学研究科）

Tamiyo Koyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

ライフ&ワークインテグレーション

Career in TEA: Life & Work Integration

榎木史子 (Learning Tree International School)

Fumiko Masaki (Learning Tree International School)

キャリアの発達における学術団体運営の意味づけ——ある大学日本語教員の Auto-TEA による分析から

The Meaning-Making of Academic Association Management in Career Development: An Auto-TEA Analysis of a University Japanese Language Teacher

小澤伊久美 (国際基督教大学)

Ikumi Ozawa (International Christian University)

TEA が示唆する日本語教育の新たな役割——キャリア形成支援の観点から

The New Role of Japanese Language Education indicated by TEA: A Perspective on Career Development Support.

ウォーカー泉 (シンガポール国立大学語学教育研究センター)

Izumi Walker (Centre for Language Studies, National University of Singapore)

指定討論：安田裕子 (立命館大学)

Debater : Yuko Yasuda (Ritsumeikan University)

複線径路等至性アプローチ (TEA) の特徴の一つに、非可逆的時間のなかで径路を描く点がある (安田, 2012)。本企画の目的は、TEA の枠組みをふまえ「キャリア」と「記号」をキーワードに、7 名の話題提供者が自身の TEA に加えた新しい理論を紹介し、現在の到達点を確認することを通して、TEA の可能性を開拓する議論を活発化させることである。また、本企画は、初学者から熟練の TEA ユーザーを対象としている。非可逆的時間のなかで径路を描く意味や分析方法についても解説することで、さまざまな目的で TEA を取り入れた研究に取り組む聴衆の研究を発展させる機会としたい。

関連文献

木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 文化心理学 [改訂版] : 理論・各論・方法論. ちとせプレス. 2023 年

安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でわかる人生の径路: 質的研究の新展開. 誠信書房. 2012 年

安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装: ライフの充実を支援する. 誠信書房. 2017 年

対 抄録集：講習会（5月25日 13：00-15：00）

（会場：501 教室）

「TEA と未来等至点で描くキャリアデザインー延長線にない未来にむけたワーク」

[Career Design with TEA and F-EFP: Toward a future beyond the extension of the past to the present.]

講師：豊田香（拓殖大学別科日本語教育課程）

Lecturer: TOYODA Kaori(Takushoku University, Bekka, Intensive Japanese Language Program)

職業人生 50 年時代を生きる働く個人は、未定さと隣り合わせの未来と向き合うゆえに、今ある未来展望が消えてしまうリスクに備える必要がある（グラットン&スコット, 2016/2016；豊田, 2022）。未来等至点（F-EFP）は、先の読めない時代に、広く一般の人々が自律的に自己理解を深め、キャリアデザインを行うための TEA を援用した概念である。その特徴は、過去の延長線上にある／ないかもしれない未来のイメージ（TLMG の第 2 層）を、今ここの自己の価値観と信念（TLMG の第 3 層）とすり合わせることで導出できることにある（豊田, 2017；豊田, 2025）。本講習では、参加者自身のキャリアデザインを通して F-EFP を理解し、TLMG についても体験的に理解を深めたい。講習では、the 11th & 12th ICDS で発表し、大学のキャリア科目や企業研修教材として実績のあるワークシート（Toyoda, 2021; Toyoda, 2024）を使用する。TEA を実装させたこのキャリアデザインは、本講習のように、最初はキャリアガイダンスが必要かもしれないが、ゆくゆくは自らが自己 TEA 分析を行い、F-EFP を導出し、必要に応じて更新することが望ましい。教育実践者として、またキャリアデザインをする働く個人として、その一助となれば幸いである。

引用文献・関連文献

- ・グラットン, L.・スコット, A. (2016) Life shift (ライフシフト)：100 年時代の人生戦略（池村千秋, 訳）. 東洋経済新報社. (Gratto, L. & Scott, A. (2016) The 100-year life. London: London : Bloomsbury Information, an imprint of Bloomsbury Publishing.)
- ・豊田香 (2017) 社会人のためのキャリアデザインー未来等至点を描くキャリアデザインセミナーの設計と実施. 安田裕子・サトウタツヤ（編著）TEM でひろがる社会実装ーライフの充実を支援する (pp.174-186) . 誠信書房.
- ・Toyoda, K. (2021) Case Study: An Educational Dialogical Approach to the Development of New Future I-positions as Promoter Positions for University

Students: Theory, Practice, and Outcomes. In H. Hermans, C. Monero, and C. Weise (Eds.), *Dialogicality. Personal, local and planetary dialogue in education, health citizenship and research* (pp.29-39).

<https://hcommons.org/deposits/item/hc:40533/>

- ・豊田香（2022）『社会人大学院がひらく科学的知識創造—トリプルループ学習理論』（新曜社）
- ・Toyoda, K. (2024) “Workshop: Career Design by “ Self-Future Trajectory Equifinality Point Model” to develop a promotor-position for Adults” in 12th International Conference on the Dialogical Self, 4-7 June 2024, Tallin, Estonia.
- ・豊田香（2025）「未来等至点」サトウタツヤ・安田裕子（編著）『TEA と質的探究用語集』誠信書房

抄録集 一般口頭発表2 (5月25日 13:00–14:50)

(会場：401 教室)

オンライン 座長 木戸彩恵 (関西大学)

Online chairperson Ayae KIDO (Kansai University)

対 02-1 13:00-13:20

移境態熱処におけるパターンシフトを促す仮構

Fabulation that promotes pattern shift on liminal hotspots

廣瀬太介 (立命館大学)

Daisuke HIROSE (Ritsumeikan University)

移境態(liminality)は、近年 TEA に新たに導入され、TEA を拡張する可能性のある概念であるが、TEA を超越する可能性もある概念である。移境態とは、世界と世界のあいだの世界でありながら、世界のなかの世界でもあり、ある世界からもう一つの世界への移行を伴う過程でもある。それに対して、永続的となった移行の状況で、人々が宙づりになっていると感じる機会のことを移境態熱処(liminal hotspots)という。人は、移境態熱処を通過する時、パラドックスを感じながらも、麻痺や両極化の状態を経て、パターンシフトする。この時、パターンシフトを促すのが仮構(fabulation)である。仮構とは、実際にはないことを存在するものとして仮に作り設けることである。本発表では、ひきこもり青年との心理面接を TEM で分析した事例を取り上げ、分岐点で生じたパラドックスをパターンシフトへと至るように促す、現実の核心にある最も深い仮構について報告する。

対 02-2 13:20-13:40

**複線径路等至性アプローチを用いた美容皮膚エキスパートナース（EDEN）のキャリア形成の
振り返りと支援ニーズの検討**

**Reflecting on the Career Development of Expert Dermatology Nurses
(EDEN) and Exploring Their Support Needs Using the Trajectory
Equifinality Approach (TEA)**

木戸彩恵（関西大学）・

野本真由美（野本真由美スキンケアクリニック）

Ayae KIDO (Kansai University) ,

Mayumi NOMOTO (Mayumi Nomoto Skincare Clinic)

美容医療に従事する看護師は、高度な医療技術と対人対応力を求められる一方で、比較的新しい分野であるがゆえに、キャリアモデルの不足や看護師間の交流の機会が限られている可能性がある。本発表では、美容皮膚エキスパートナース（EDEN）がキャリアを振り返ることを通じて、専門性やアイデンティティを再認識し、職業的コミットメントを高めることを目的に実施した、全3回のオンラインワークショップの実践事例を報告する。ワークショップでは、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用い、14名の参加者が自己のキャリアを振り返るとともに、他者へのインタビューやキャリア径路の比較を行い、多様な視点から自己理解を深める機会を提供した。発表では、作成したTEM図をもとに、EDENとしてのキャリア形成において求められる支援やリソースについて考察する。

対 02-3 13:40-14:00

Model か Modeling か、それが問題だ ——なぜ ing で名詞は動き出すのか

Model or Modeling, That Is the Question — Why Does -ing Animate Nouns?

伴野崇生（慶應義塾大学）

Takao TOMONO (Keio University)

本発表の目的は、ing によってプロセス、動態性を強調できるのはなぜかについて文法論的に考察した上で、その日本語の訳出に関して語彙論を踏まえつつ若干の議論を行うことにある。Modeling(TEM)、Inviting(HSI)、そして書籍には TEA/TEM の Making パートがあるなど、ing はこの領域において非常に重要である。だが、Trajectory Equifinality Model だった TEM が Modeling と改称されて久しいにも関わらず、最近でも新しく出た論考に Trajectory Equifinality Model と書かれているなど、ing に無頓着と思われる例も散見される。本発表ではサトウ(2022)が解釈的に行っている「英語の ing 考」を言語学的に捉え直すことで、TEA における ing の重要性について再度強調するとともに、「～づけ」という訳の意義と課題についても議論する。

対 02-4 14:00-14:20

保育環境において子どもの ICT 活用はどのように進められてきたのか —複線径路等至性モデリング (TEM) を用いた研究動向の分析—

How has the use of ICT for children been promoted in childcare environments? Analysis of Research Trends Using Multi-Route Isentropic Modeling (TEM)

田島美帆（広島大学大学院教育学研究科）・

大道香織（広島大学大学院人間社会科学研究科）・

渡邊真帆（福山市立大学）・

中坪史典（広島大学大学院人間社会科学研究科）

Miho TAJIMA (Hiroshima University) ,

Kaori OMICHI(Hiroshima University, Graduate School of Human and Social Sciences) ,

Maho WATANABE (Fukuyama City University) ,

Fuminori NAKATSUBO(Hiroshima University, Graduate School of Human and Social Sciences)

近年、保育の現場において、子どもの ICT の活用をすすめる動きがある。現行の「幼稚園教育要領解説」には、それまでに記載のなかった「情報機器の活用」に関する項目が加えられ「幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること」が明示された。すなわち、子どもの学びを充実させるための道具として活用することが求められているわけだが、同時に、子どもの発達を考慮し、使用する目的や必要性を十分に自覚しておく必要性あるなどの留意点も多い。本発表では、保育における子どもの ICT 活用の研究動向を探り、可能性と課題を検討することを目的とする。活用を促進・阻害する要因は何なのかを探るため、複線径路等至性モデリング (TEM) を用いた分析を試み、今後の ICT 活用にあたっての有用な知見を得ることとする。

質疑応答 14:20-14:50

ポスター発表 2 (5月25日 13:00-14:30)

(会場：4 階 ラウンジ)

対 P2-1 ブラジルの公教育以外に所属する日本語教師のキャリア形成

Career Development of Japanese Language Teachers Belonging to Non-Public Education in Brazil

向井直人 (筑波大学大学院国際日本研究学位プログラム (博士後期課程))

Mukai Felipe Naotto (University of Tsukuba, Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies)

近年、世界の日本語教師数が増加に伴い、世界で活躍している日本語教師のキャリアに関する研究も進められている。そこで、本発表では 100 年以上の日本語教育の歴史を持つブラジルに焦点を絞り、ブラジル日本語教師のキャリアのあり方の検討を目指し、キャリア形成の過程にある分岐点 (BFP)、ブラジルで日本語教師におけるキャリアの選択や継続に影響する諸要因を明らかにすることを目的とする。調査対象者は、ブラジルの公教育以外の機関 (日本語学校や語学学校など) に勤務する日本語教師 4 名に半構造化インタビューを行い、それぞれの TEM 図を描いた。「日本語教師を継続する」を EFP とし、TEM 図を統合した結果、「ブラジル国内外の研修への参加」「研修の企画や次世代の育成」などが日本語教師としてのキャリア継続を促していることがわかった。一方で、「日本語教師のネットワークの不足」「日本語環境の少なさ」などのキャリア継続を阻害する要因が見られた。

対 P2-2 プロの日本語教師になった人物が地域日本語教育に積極的に関わるプロセス

Process for Someone who Became a Professional Japanese Language Teacher to be Actively Involved in Regional Japanese Language Education.

廣川 智・古田梨乃（新潟大学）

Satoshi HIROKAWA, Rino FURUTA (Niigata university)

年々増加している在留外国人は、育成就労制度の創設に伴い滞在の長期化が予想されている。また、2024 年より日本語教師が国家資格となったことは、国として日本語教育の質を担保しようとする姿勢の表れであると言える。このように日本語教育の環境整備や教育人材の質および量の確保が今後さらに重要となる。日本語教育に関わる人材の確保と、これからの地域日本語教育の在り方の示唆を得るべく、プロの日本語教師として「地域日本語教育の発展のために活動」している E 氏に聞き取りを行い TEA による分析を行った。その結果、日本語教師の資格取得を促すために、日本語教師の認知度を上げること、国際教育や留学の促進が図られることが必要であることがわかった。また、よりよい地域日本語教育を目指すために、支援者の役割分担が明確になされ、無償ボランティアに頼る環境が改善されることで質の保障された教育が提供できること、新参加者が参入しやすい教室であることが重要であることが示唆された。

対 P2-3 民間企業勤務公認心理師のキャリア発達研究

A Study on the Career Development of Certified Public Psychologist Working in Private Companies

高木文（立命館大学）・

サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

Aya TAKAGI (Ritsumeikan University) ,

Tatsuya SATO (Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology)

本研究は、公認心理師資格を有しながら民間企業に勤務する若年就労者のキャリア形成について明らかにすることを目的とした。第7回公認心理師試験Aルート合格者を対象に、半構造化インタビューを実施し、テキストマイニングと複線径路等至性モデリング（TEM）を用いて分析した。その結果、心理師としての専門性が直ちに業務に反映されるわけではなく、基礎的な業務を通じて信頼を築く過程が重要であることが示された。また、心理学的知識は職場での対人関係や課題解決に貢献する一方、組織側の理解や受け入れ態勢が不十分であることも課題として浮かび上がった。資格の活用可能性と困難さを可視化した本研究は、公認心理師の多様なキャリアの在り方を考える上での一助となることを目指している。

対 P2-4 不安定な愛着スタイルを持つ日本人青年の恋愛維持プロセス —複線径路・等至性モデリング(TEM)による分析—

The Romantic Relationship Maintenance Process of Japanese Young Adults with an Insecure Attachment Style: An Analysis Using Trajectory Equifinality Modeling (TEM)

王怡淵（立命館大学）・

矢藤優子（立命館大学 総合心理学部）・

安田裕子（立命館大学 総合心理学部）

Yiyuan WANG (Ritsumeikan University) ,

Yuko YATO (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan Univ.) ,

Yuko Yasuda (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

本研究では、不安定な愛着傾向を持ちながらも関係満足度が高い日本人カップル（20代～50代）を対象とした。参加者はアダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）およびカップル満足感尺度（CSI-4）により選定され、「回避×回避」「不安×不安」「安定×不安」の組み合わせに該当する3組のカップルに半構造化インタビューを実施した。分析には複線径路等至性モデリング（TEM）を用い、各組み合わせが恋愛関係の維持にどのような特徴をもたらすのかを時間軸に沿って検討した。今後は、親密関係における愛着スタイルの組み合わせに関する総合的なフレームワークの構築を目指す。

対 P2-5 対立問題を解決に導く葛藤の三層モデルの確立

Establishment of a Value-Sign-Action three layers model of conflict that leads to resolution of conflict issues

岡本 真侑（立命館大学大学院人間科学研究科心理学領域）・

サトウ タツヤ（立命館大学総合心理学部）

Mayu OKAMOTO（Ritsumeikan University Graduate School of Human Science）,

Tatsuya SATO（Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology）

文化の違いから自分と相手との認識や行為のずれを実感することで、同じ価値観を持っていたとしても「自分とはかけ離れた価値観を持っている」と考えてしまうことがある。こうした対立問題の課題を視覚的にわかりやすく示すことで支援策を検討する際に役立つと考え、TLMGをもとに葛藤の三層モデルを作成した。まず予備調査では半構造化面接を行い、対立には「価値対立パターン」と「行為対立パターン」があることが確認され、対立問題を解決に導くには「行為対立パターン」から「価値対立パターン」へと移行することが重要であることが明らかになった。本調査では、このモデルの実用性を検証するために、東日本大震災の復興を願うモニュメント「サン・チャイルド」像設置をめぐる茨木市と福島市の意見対立を対象とした。半構造化面接を行った結果、意見対立の原因は、設置時期、デザイン、東日本大震災に対する意識の違いに起因することが判明した。

対 P2-6 なぜ中等教育で教える公務員としてのノンネイティブ日本語教師が辞職したのか —TEAによる分析—

Why a Non-native Japanese Teacher Working as a Civil Servant in Secondary Education Resigned: An Analysis through TEA

沈韻（立命館大学）

Yun SHEN（Ritsumeikan University）

本研究は、中国上海において公立高校で公務員としての日本語教師を辞職した後、再度国際高校で日本語教師をしているA氏のキャリア形成過程の可視化を試みたものである。研究の目的は、これまでの研究では十分に注目されてこなかったノンネイティブの公務員としての日本語教師のキャリア観を理解し、海外の中等教育段階における日本語教育のあり方に貢献することである。複線径路等至性アプローチを援用して分析した結果、離職を促した要因として、待遇問題、日本語教師に対する支援体制の不十分さ、昇進の道筋の不透明さ、さらに、AI技術の発展により「言語教師がAIにとって代わられる」という不安が挙げられた。一方、「三十にして立つ」という伝統的な価値観の影響を受け、「日本語教師はやりがいがあり、かつ自立の土台となる職業である」と考えるようになり、結果として再び日本語教師としての職に復帰するに至った径路が明らかとなった。

対 P2-7 日本語学習におけるグロースマインドセットを育むー複線径路等至性アプローチを活用してー

Fostering a growth mindset in Japanese language learning: Using the Trajectory Equifinality Approach

スニーラット・ニャンジャローンスック（タマサート大学教養学部日本語講座）

Suneerat NEANCHAROENSUK (Thammasat University)

本研究では、内気な生徒が自信をもって日本語を学習するために必要な要因を明らかにすることを目的とした。対象として、タイの高校に通う A さん（仮名）の日本語学習態度の変容過程を取り上げた。A さんは日本語を話すことに対して苦手意識を持ち、積極的に発話しようしないという特徴を持つ。これはタイの高校生に見られる傾向で、A さんはその典型例として本研究の対象とされた。半構造化インタビューを実施し、そのインタビューデータを複線径路等至性アプローチを用いて分析した。具体的には、等至点や分岐点を特定し、学習の継続を促進する要因や阻害する要因を時間的経過とともに整理した。その結果、保護者、教師、友人が生徒の学習態度の変容において重要な役割を果たしていることが明らかになった。特に、教師の具体的なフィードバックや課外活動への参加を促す学習環境の工夫が、生徒の自己効力感を高め、グロースマインドセットの育成に寄与することが示された。

対 P2-8 取り下げ

対 P2-9 障害のある子どもを育てる父親の体験と心理的過程 : 親の会で活動する父親とのインタビューから

Fathers' Experiences and Psychological Processes in Raising Children with Disabilities: Interviews with Fathers Engaging in Parent Support Groups

高橋 彩 (岡山大学学術研究院教育学域)・

増井 美帆、(社会福祉法人桃園)

Ayaka TAKAHASHI (Okayama University) ,

Miho MASUI (Social Welfare Corporation Momozono)

本研究では、親の会に在籍して活動する5名の父親とのインタビューを実施し、障害のある子どもを育てるという経験を通しての心理的過程を検討した。ライフラインインタビューメソッドにより、子どもの妊娠が分かったときから現在までの心境をチャートに描いてもらい、それをもとに子育てや親の会の活動に関わるうえで経験した出来事とその時の心情を語ってもらった。語りを元にTEM図を描いた結果、父親たちはわが子の居場所をつくるための活動や就学等の出来事をきっかけに横のつながりが形成されることで「自分だけではないという感覚」を得ることが示唆された。また、父親同士のつながりを形成することで、母親に依拠しがちな子育てに親として関与しようとする父親の姿が見いだされた。一方で、同じ親の会の中でも子育ての悩みには多様性と個別性があり、そのようなわかりあえなさを感じつつも支え合おうと活動に関与する父親の姿が明らかとなった。

対 P2-10 英知と推し活の関係についての検討 -TEM（複線径路等至性モデリング）と個体化を用いて-

Examining the Relationship Between Wisdom and Fan Activities (Oshi-Katsu): Using Trajectory Equifinality Modeling (TEM) and Individuation

福山未智（立命館大学人間科学研究科）・

中山絢菜（元立命館大学総合心理学部）・

サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

Misato FUKUYAMA (Graduate School of Human Sciences, Ritsumeikan University) ,

Ayana NAKAYAMA (Former College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University) ,

Tatsuya SATO (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

本研究は、アイドル等を応援する活動である「推し活」と行動変容の関係性をシモンドンの個体化理論を援用して検討したものである。第二著者の推し活経験を Auto-TEM を用いて分析し、さらに 1 名の推し活経験者にインタビューを行い TEM を用いて分析することで、個体化のプロセスを明らかにした。その結果、両者の推し活には「前-個体化」（不均衡状態）、「エネルギー発生」（活動）、「個体化」（解決）という一連のプロセスが繰り返し確認された。具体的には、消極的だった性格が積極的になる、一人行動への抵抗が消失する、多様な価値観を持つ人との交流によって異なる考え方を受容する能力が向上するなどの変容が見られた。これらの推し活を通じて獲得されたスキルは、バルテスの提唱する英知の評価基準における「ノウハウの知識」と「相対性の考慮」の側面を満たしており、推し活が単なる趣味活動を超えて個人の認知的・社会的発達に寄与する可能性が示唆された。

対 P2-11 複線径路・等至性モデル（TEM）によるいじめの仲裁経験と傍観経験における道徳的判断の形成過程の分析 -その共通性と差異-

An analysis of the formation process of moral judgments in an experience of defending the victim of bullying and that of taking a bystander role in bullying based on the Trajectory Equifinality Model (TEM): Commonalities and differences

吉國 陽一・横尾暁子（田園調布学園大学）

Yoichi YOSHIKUNI and Akiko YOKOO（Den-en Chofu University）

本発表ではいじめの傍観経験と仲裁経験において、当事者が社会的文脈の中で道徳的判断を形成するプロセスを比較し、その共通性と差異について検討する。本研究では道徳的判断を社会的文脈に埋め込まれた心理-社会的プロセス(Bandura, 2016)と捉えている。いじめという社会的文脈を共有する点において仲裁経験と傍観経験は共通性を持ちつつ、何らかの要因が両者を隔てているという仮説に基づいて本研究を実施した。傍観経験者 1 名と仲裁経験者 1 名についてインタビュー調査に基づき、TEM 図を用いて両者の道徳的判断の形成を描きだすことを試みる。TEM 図の中に仲裁行動をとるための動機にかかわる動機の位相と仲裁行動に伴うリスクが社会的環境の中にどの程度存在するかにかかわる環境の位相を見出し、両者の関係に着目して仲裁経験と傍観経験を比較し、分析する。

抄録集 一般口頭発表 3 (5月25日 15:00–16:50)

(会場: 401 教室)

オンライン 座長 上川多恵子 (波多野多恵子) (創価大学文学部)

Online chairperson Taeko Kamikawa (Taeko Hatano) (Soka University)

オ 03-1 15:00-15:20

**外国人留学生の内的キャリアとキャリア展望——自己分析ワークを用いた文化心理学的
考察**

**Internal Career and Career Prospects of International Students: A
Cultural-Psychological Analysis Using Self-Analysis Worksheets**

上川多恵子 (波多野多恵子) (創価大学文学部)・

安田裕子・サトウツヤ (立命館大学総合心理学部)

Taeko Kamikawa (Taeko Hatano) (Soka University),

Yuko Yasuda and Tatsuya Sato (Ritsumeikan University)

本発表では、外国人留学生 9 名を対象とした「内的キャリアを通じた自己分析ワーク」の実践報告を行う。近年、留学生が自己向上志向を持ちつつも具体的な職業選択基準を有していないという課題 (井上 2016、後藤 2020) が指摘されており、本研究では留学生の内的キャリアとキャリア展望の関係について分析することを目的とした。本研究では TLMG (発生の三層モデル) とイメージネーション理論を援用して作成したワークシートを用いた。ワークでは、①「今、目指す結果」、②「今の自分の生活環境」、③「自分が特に注意を向けていること」(例: 給料、社会貢献、これまでの経験、先輩・両親などの他者、専門など) を考えることで、どのような過去と未来を結びつけ、留学生自身がどのような④「キャリア選択における自分の価値観」を有しているのかを自己分析した。ここではキャリアを「個人が生涯を通じて経験する活動や役割、およびそれに関連した態度や行動の連鎖」(荒木 2015) と考え、留学生の自己理解促進とキャリア支援の在り方について議論を深めたい。

オ 03-2 15:20-15:40

大学を休学した韓国人留学生の復学に至るまでの過程とキャリア選択

The Process of Returning to University and Career Choices of a Korean International Student Who Took a Leave of Absence

稲田 栄一（関西学院大学）

Eiichi INADA (Kwansei Gakuin University)

本研究は、大学を休学した留学生の復学プロセスと復学後の大学生活の様相を TEA により明らかにすることを旨として実施したものである。目的は、休学者に対する復学後の適切な支援や大学側の受け入れ態勢の整備に資する知見を提供することである。研究手順として、まず「大学への復学」を等至点として設定し、その経験者である韓国人留学生 1 名に HSI および半構造化インタビューを行った。対象者は日本国内の大学を休学後、ワーキングホリデー制度によるカナダ滞在を経験し、調査時点では復学後の 3 年次に在籍していた。計 3 回のインタビュー結果をもとに、休学前・休学期間中・復学後という 3 つの時期に区分した TEM 図ならびに TLMG を作成した。TEA による分析の結果、休学前・休学期間中の経験を通して形成された「自由・多様性を重んじる場でキャリアを築きたい」というビリーフが、復学後の当人の行動や就職活動における企業選択等に深く関わっていることが示唆された。

オ 03-3 15:40-16:00

地域在住高齢者への効果的な食支援に向けた探索的質的研究－複線経路等至性モデリング（TEM）を援用した分岐点分析－

An Exploratory Qualitative Study for Designing Effective Meal Support for the Elderly Community-Dwellers: A Bifurcation Point Analysis with the Trajectory Equifinality Modeling (TEM).

石田由美子（立命館大学 BKC 社系研究機構）・

久藤麻子（大阪医科薬科大学医学部）・

保井智香子（立命館大学食マネジメント学部）・

太田はるか（京都大学大学院医学研究科）

Yumiko ISHIDA(BKC Research Organizaion of Social Sciences, Ritsumeikan University),

Asako KUDO (Faculty of Medicine, Osaka Medical and Pharmaceutical University) ,

Chikako YASUI (College of Gastronomy Management, Ritsumeikan University) ,

Haruka OTA (School of Public Health, Kyoto University)

本研究の目的は、地域在住高齢者への食支援をより効果的に設計するために、高齢者が食事の価値を意識するプロセスと背景要因を質的手法により形式知化することである。発表者はこれまでに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）により高齢者が食事の価値を意識するプロセスを明示した。その中にはいくつかの重要な分岐点（高齢者の食への葛藤）の存在が示唆されたため、さらに複線経路等至性アプローチ（TEA）の理論を参考に再分析した。具体的には複線経路等至性モデリング（TEM）の手続きを援用しプロセスの分岐点および影響する諸要因について可視化した。その結果、分岐点に影響する個人的要因として家族との関係性、身体機能の状態、食の楽しみ方の再評価等が明示された。TEM を援用した分析により、食支援等の介入がどの分岐点に影響を与え得るのかを示すことが可能になり、効果的な食支援設計の一助となることが期待される。

オ 03-4 16:00-16:20

重度知的障害児・者の身辺自立を目指す父親の子育て経験プロセス-複線径路・等至性モデルによる一事例の分析-

The Parenting Experience Process of a Father Aiming for the Personal Independence of a Child with Severe Intellectual Disabilities: A Single Case Analysis Using the Trajectory Equifinality Model

茂呂征弥・大橋匠（東京科学大学）

Seiya MORO and Takumi OHASHI（Institute of Science Tokyo）

近年、障害児・者を育てる家庭においても父親の育児参加の重要性が指摘されているが、父親視点からの子育てプロセスの理解は十分に進んでいない。本研究の目的は、重度知的障害児・者の身辺自立を目指す父親の子育てプロセスを明らかにし、父親視点からの子育て経験の理解することである。本研究では、責任発表者自身の父親に対して半構造化インタビューを実施し、複線径路・等至性モデルを用いて分析を行った。等至点は「1人で生きていくスキルを身に着けている状態にする」と定義し、分岐点として「話すこと以外のことをできるように取り組むように考える」「家族と過ごす時間を増やすために引っ越しを促す」「地元の方に家族を戻す」の3点を抽出した。これら3つの分岐点は、「子どもおよび家族にとって子育てしやすい施策・環境を選択する行動」として解釈され、家族の暮らしを第一に考えながら子育てに取り組む父親の子育て経験に関する知見が得られた。

質疑応答 16:20-16:50

抄録集 ポスター発表 3 (5月25日 15:00-16:30)

(会場: 4 階 ラウンジ)

対 P3-1 メタバース利用における性格と人生満足感の変化

Changes in personality and life satisfaction in Metaverse use

中野紗希 (立命館大学人間科学研究科)・

サトウ タツヤ (立命館大学総合心理学部)

Saki NAKANO (Ritsumeikan University),

Tatsuya SATO (Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology)

本研究は、メタバースを「ユーザーがアバターを介して他者と交流し、自己表現や社会的つながりを築く場」として捉え、物理的制約を超えた新たな「居場所」としての側面から調査した。中でも、実際に「居場所」の活動事例がある VRChat に焦点を当て、参加者の性格変化や人生満足感に与える影響を明らかにし、現実世界との相互作用について TEM を用いて検討を行った。結果、VRChat には参加者の人生経験を反映させ、活動の幅を広げられる環境があり、そこに集まる人々の活発で積極的なコミュニティが人生満足度に影響を与えることが分かった。VRChat 内では身体や立場に影響されない新たな自分を楽しめる空間として多様な活動や創造的な営為が展開されていた。活動に参加していく中で新たなコミュニティを構築し、目的を持ったコミュニティメンバーの 1 人として参加できるため、単なる仮想空間以上の価値を提供しており、そして新たな「居場所」になることがわかった。

対 P3-2 公立高校における日本語母語話者教師の実践 – 立場の異なる教師 2 名と生徒の記号のズレを TEA で問いなおす –

**The Practice of Japanese Native Speaking Teachers in Public High Schools
- Using TEA to study the misrecognition between the sign of two teachers
with different stances and their students –**

市川章子（国立国語研究所）

Akiko ICHIKAWA（National Institute for Japanese Language and Linguistics）

言語教育や教育領域の TEM に関する研究は、参与観察やインタビューによる個人的経験の回顧的な語りを中心に行なわれてきた。本研究の目的は、日本語母語話者教師の実践を TEM で描くことで、公教育における外国籍生徒等の日本語教育の課題について考えることである。研究対象は、公立高校で日本語教育の実践を行う日本語母語話者教師である。日本語母語話者教師が高校教師に送ったメールと実践記録を複線径路等至性アプローチ（TEA）の主要な概念である EFP、P-EFP、BFP と中核の想像（COIM）、OPP、SD、SG 等を用いて分析した。サトウ（2017）の「時間を超えた文脈における記号理解の難しさ」の理論に新しく現在の時間的文脈における記号理解の難しさについて、「現在の時間的文脈における対象者が表現する詩や語りは、無理に読み解こうとせずにありのまますを記録することで、理解されたり新しい意味を持つ」ことが示唆された。

対 P3-3 ストレスフルイベントにおけるポジティブ志向の現れ方についてーポジティブ志向の形成と維持に関する混合研究法的検討ー

The manifestation of positive thinking in stressful events: A mixed-methods research of the formation and maintenance of positive thinking.

三日月礼乃（立命館大学院）・

サトウタツヤ（立命館大学）

Ayano MIKAZUKI (Ritsumeikan University) ,

Tatsuya SATO (Ritsumeikan University, College of Comprehensive Psychology)

本研究では、大学生が直面する就職活動を「ストレスフルイベント」と位置付け、ポジティブ志向の形成・維持の要因を明らかにした。混合研究法で行い、量的研究では、行動力やポジティブ思考が就職活動に対する肯定的な認知に有意な影響を与えることが示された($R^2=0.621$)。その後、質的研究では、複線径路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)を用いて、個人の内的特性(過去の経験や行動特性)と外的要因(目標や行動の意味づけ)が相互に作用してポジティブ志向が形成・維持されるプロセスを分析した。これらの結果は、Bandura(1977)の自己効力感理論や Lazarus & Folkman(1984)の心理学的ストレスモデルの知見と一致しており、ストレスフルイベントへの適応において、自己および状況へのポジティブな認知が重要であることを示唆している。一方で、ポジティブ志向と幸福感の関連や、他のストレスフルイベントへの適用可能性については今後の課題として残された。

対 P3-4 外国にルーツをもつ子どもの支援者の活動とその促進要因の検討

A Study on Support Activities for Children of Foreign Workers and Their Promoting Factors

福田茉莉（岡山大学）・

土江梨奈（島根大学）

Mari FUKUDA（Okayama University）,

Rina Tuchie(Shimane University)

本研究の目的は、外国人就労者が増加する地域において、外国にルーツをもつ子どもの支援活動を行うに至った支援者の活動遍歴を明らかにし、その促進要因を検討することであった。調査協力者は、外国にルーツをもつ子どもを支援するプロジェクトの代表である A 氏であった。2024 年 6 月から 12 月にかけて、A 氏にインタビュー調査を複数回実施した。複線径路等至性モデリングを用いて、A 氏がかねてより実施してきた多文化共生に向けた支援活動の変遷を分析した。その結果、A 氏の活動は社会情勢や多文化共生を推進する施策と密接に関連していた。その一方で、ネットワークの拡がりや地域のリソースを活用することで、支援活動が維持できるような働きかけが行なわれていた。外国人就労者が増加傾向にあり、支援者自体も不足している現状がある。多文化共生だけでなく、地域共生社会の実現に向け、主に教育機関と連携したプロジェクトが展開されていた。

対 P3-5 災害後の生活復興プロセスと周囲の人びととの関係の変化

Post-Disaster Processes of Life Restoration and Changes in Relationships with Others

河本尋子（常葉大学）

Hiroko KOUMOTO（Tokoha University）

本研究は、大規模災害を事例に、災害後の生活復興に向かうプロセスと、その径路における周囲の人びととの関係に着目したものである。本研究目的は、災害発生後に、被災した人びとがどのような影響を受けながら行動し、どのような分岐があり得たのか等を把握し、その時系列の流れの中で、彼らと周囲の人びととの関係がどのように変化していたのかを明らかにすることであった。研究方法として、複線径路・等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）を用いて、調査・分析をおこなった。本研究の分析では、径路における社会的助勢・社会的方向付けや分岐点の様相、それらと時系列的な人間関係の変化との関連性、立木（2022）が指摘する生活復興感に影響する関係の有無等の可視化を図る。

対 P3-6 特別支援学校で医療的ケア児に関わる学校看護師の勤務継続プロセス —勤務校を変えても続けるという選択に着目して—

The Process of Continuing to Work for School Nurses Working with Children with Medical Care in Special Needs Schools -Focusing on the Choice to Continue to Work Even after Changing Schools Nurses Working with Children with Medical Care in Special Needs Schools

林田一子（藍野大学短期大学部）

Kazuko Hayashida (Aino University Junior College)

本研究の目的は、特別支援学校で医療的ケア児に関わる学校看護師が勤務校を変更させながら勤務を継続したプロセスを明らかにし、継続要因について検討することである。HSI に基づき、医療的ケア児が在籍する特別支援学校に2年以上勤務を継続した学校看護師1名（以下、A氏）に対し、大学倫理委員会の承認を得てインタビューを行った。大変だったことや有意義だったこと、勤務を続ける際に助けになったことをライフライン法を用いて語ってもらい、3回の語りをTEM図で示した。A氏は複数の仕事を並行して学校看護師の仕事を続ける中でインシデント発生を機に退職を考えたが、他校へ出張をキッカケに、勤務校を変更することで学校看護師を続けていた。勤務校を変更させるという分岐点に着目し、個人領域と社会領域に働く文化的な力である「社会的諸力」を明らかにし、勤務を継続する要因について検討した。付記：本研究はJSPS科研費（23K09910）の助成を受けて実施した。

対 P3-7 職業訓練校での学び直しを経た若者たちのその後—フィリピン・ミンダナオ島北部を事例に—

Life Trajectories of Youth After Attending a Vocational Training School: A Case Study in Northern Mindanao, Philippines

金井貴佳子（慶應義塾大学）

Takako KANAI (Keio University)

本研究は、フィリピン・ミンダナオ島北部の職業訓練校に通い、修了後に仕事を得て生計を立て始めた若者や、大学進学を決めた若者など4名を対象にインタビューを実施し、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析したものである。分析の結果、資格取得に加え、アメリカ開発庁（USAID）によるソフトスキルを育むモジュールの効果や、家族・地域との関係性が修了後の選択に寄与していたことが示唆された。本発表では、4名の若者たちが職業訓練修了後にどのような選択をしたのか、その背景にある意味を考察する。

対 P3-8 メンターXさんの介入における意思決定過程とその根拠

The Decision-Making Process and Rationale Behind Mentor Xs Interventions

小坂凜（京都産業大学）

Rin KOSAKA (Kyoto Sangyo University)

本研究は、中堅日本語教師のための研修におけるメンターXさんの介入における意思決定過程とその根拠を明らかにすることを目的とする。研修は、Zoomでの同期型研修と、Slackでの非同期型研修を組み合わせた複合型の学習形態で開講され、全てオンラインで実施された。研修に参加した研修生Aさんの研修期間中の意識と行動の変容プロセスおよび、メンター、チームメンバーらの働きかけを、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）を用いて可視化した。本研究では、研修期間中のSlack上でのメンター、チームメンバーらとの非同期でのやり取りに焦点を当て、メンターXさんがどのようなキュー（研修生の反応）をもとに、どのような解釈をし、どのような代替策を考え、その中からどのような根拠をもとに最良の選択をしていたのかを分析する。さらに、メンターXさんが自身の意思決定過程を批判的に振り返る過程で、何を学んだのかを考察する。

対 P3-9 関係学から複線径路等至性アプローチ（TEA）への接近

Approaching Trajectory Equifinality Approach (TEA) from Science of Relationships

乾明紀（京都橘大学）

Akinori INUI (Kyoto Tachibana University)

関係学は、人間を関係的存在と捉え、自己・人・物のかかわりの構造とその機能を複数の円によってトポロジ的に描き、その関係発展を分析する質的探究の方法論である。この関係学の枠組みは、キャリア発達の分析にも有用であり、筆者は複線径路等至性アプローチ（TEA）との融合を模索してきた（乾・サトウ,2023 など）。しかし、TEAと関係学の接続には、自己・人・物のかかわりをより適切に捉える必要があり、この点が課題であった。関係学のかかわりの原理によれば、自己は主として内在、内接、接在の3つのかかわり方が可能な機能的存在であり、人は内接、接在、外在の3つのかかわり方が可能な現実的存在である。そして、物は接在、外接、外在の3つのかかわり方が可能な実在的存在として捉えられる（松村・斎藤,1991）。本研究では、この原理を基盤にTEAを再検討し、関係学的視点からTEAの拡充を試みる。

対 P3-10 高次脳機能障害者の配偶者が生活を再構築していくプロセス

The spousal life reconstruction process of the brain injured person

宮田孝子（札幌市立大学看護学研究科博士後期課程）

MIYATA Takako (Sapporo City University)

目的：高次脳機能障害者の配偶者（以下、配偶者）は、重い介護負担感や抑うつ等を抱えながら生活しているものが多く、生活の再構築を支える支援が必要と示唆されている。しかし配偶者の生活の再構築とそのプロセスは明らかではなく支援の方向性は明確ではない。そこで本研究は、配偶者の生活の再構築とそのプロセスを明らかにすることを目的とした。

方法：パートナーが高次脳機能障害を抱えたことによる生活の変化になんとか対応できるようになったと認識して生活している配偶者 6 名を研究に招待し、ライフラインインタビューメソッドを用いた半構造化インタビューを行い TEM を作成した。

結果：配偶者の生活の再構築のプロセスは、“障害を抱えたパートナーとのほどよい距離を保ち、お互いに楽しみを持ち穏やかな気持ちで生活できるようになることに向かうこと”であり、高次脳機能障害の障害特性や経済等が再構築の促進阻害要因となることが分かった。

対 P3-11 ミドル期の教師がセカンドキャリアを選択するプロセス

The process by which Mid-career teachers choose a “second career”

小杉 進二（山口大学）

Shinji KOSUGI (Yamaguchi University)

本発表は、定年退職を待たずして転職や起業を選択した（「セカンドキャリアを選択した」）教師について、当該意思決定に至るプロセスとその背景や要因について検討したものである。

先行研究では、キャリアにはいくつかの大きな転機・節目があり、それをきっかけとした変容があるとする、いわゆるトランジションモデルが提唱されてきた。これに対し、今回の分析で着目した教師のセカンドキャリア選択では、トランジションモデルが示すような不連続なプロセスではなく、むしろ「個—組織」間に生じる複数の不適合感の連鎖が、当該選択に至る背景として析出された。

このことを踏まえ、本発表では教師がセカンドキャリアを選択するプロセスに生じる葛藤や逡巡を TEA による分析によって迫りたい。

対 抄録集：研究交流委員会企画ワークショップ

(5月25日15：15-17：00)

(会場：5階 講堂)

hana-TEM アートで描くわたしの径路

hana-TEM, my path depicted in art

研究交流委員会 中坪史典（広島大学）・土元哲平（立命館大学）・上川多恵子（創価大学）・中本明世（甲南女子大学）・加藤望（名古屋学芸大学）

Fuminori Nakatsubo（Hiroshima University）,Teppei Tsuchimoto（Ritsumeikan University）,Taeko Kamikawa（Soka University）,Akiyo Nakamoto（Konan Women's University）,Nozomi Kato（Nagoya University of Arts and Sciences）

このワークショップは、「TEAと質的探究学会研究交流委員」会が企画する、アートによって人生径路を描くことを通して、参加者同士の交流をひらくものです。具体的には、花や石などの素材を用いてTEMを作り（hana-TEMと呼びます）、それをもとに他者と交流します。人と話すのが苦手、自分自身のことについて言語化するのは苦手という方でも大丈夫です。ことばにする必要はありません！「さまざまな作品を眺め、感じ、浸る」ことによる共感、ないし他者の感覚と関わることを大切にします。hana-TEMは、TEMの基本的なスキームを活かしながらも、言語にこだわらずに、人生径路における「曖昧さ」や「複雑さ」をより豊かに表現することを目指します。hana-TEMを作成し、他者と交流することは、自分自身の癒やしになります。また、芸術を通して自己・他者との対話や内省を深める効果も見込まれます。皆様のご参加をお待ちしております。

関連文献

土元哲平・上川多恵子・中本明世・加藤望・中坪史典（2024）「hana-TEM：アートで描くわたしの径路：TEA と質的探究学会第 2 回大会・研究交流委員会企画ワークショップ」『質的研究と社会実装』立命館大学ものづくり質的研究センター紀要, 創刊号, pp. 1～12

対 抄録集：講習会（5月25日 15：15-16：30）

（会場：501 教室）

TEA のいろは—TEM の基礎を学ぼう—

Learn the basics of TEM

講師：安田裕子（立命館大学総合心理学部）

Lecturer:Yuko Yasuda（College of Comprehensive
Psychology, Ritsumeikan University）

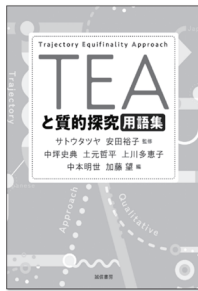


複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）は、過程と発生をとらえる質的研究の方法論である。TEAは、文化心理学に依拠し、文化的存在である人の発達や人生径路を描出する方法「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」が、その原点にある。TEM は等至性（Equifinality）の概念を発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込もうと考えたヤーン・ヴァルシナー（2001）の創案にもとづく。等至性の概念では、人間は開放システムととらえられ、歴史的・文化的・社会的な影響を受け多様な軌跡を辿りながらも、ある定常状態に等しく（Equi）到達する（final）存在（安田，2005）とされる。TEM では、研究目的に照らして等至性を具現化する選択や行動を等至点として焦点化し、等至点に至りそこから持続する人間発達や人生径路の多様性・複線性、潜在性・可能性を、非可逆的時間と文化的・社会的な諸力とともにとらえる。本講座では初学者向けのものである。ペアワークを通じて体験的に学ぶ。

引用文献

Valsiner, J.,（2001）. Comparative study of human cultural development, Madrid:
Fundacion Infancia y Aprendizaje.

安田裕子.（2005）. 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226



TEA と質的探究用語集

サトウタツヤ・安田裕子 監修
中坪史典・土元哲平・上川多恵子
中本明世・加藤 望 編

A5 判
3300 円

時間の経過とともにある人生径路や人間発達の多様性、複線性を捉える質的探究の方法論であるTEA（複線径路等至性アプローチ）について、その基本概念やそれに関連する多様な理論を体系的に整理して解説する。取り上げた見出し語は150以上で、1ページ1項目を基本にまとめた。さらに、TEAが拡がりを見せる9つの学問分野の動向も解説する。TEAの概念や関連用語は現在進行形で発展を続けているが、本書は質的探究の羅針盤となる用語集である。

目次

第1章 TEAの基本概念

第1節 TEAの基本的枠組み 第2節 TEMにおける概念ツール 第3節 TEAの研究手続き（TEAの実際）

第2章 プロセスの理解（新しい文化科学）

第1節 TEAにおけるプロセスの探究 第2節 TEAにおける時間概念 第3節 TEA分析の拡張

第3章 理論の深化

第1節 文化心理学の源流 第2節 ヴィゴツキーの記号論的文化心理学 第3節 ヴァルシナーの記号論的動態性の文化心理学

第4節 TEAと関係の深い文化心理学の概念 第5節 TEA理解を深めるための概念 第6節 TEA理論を発展させるために知っておいてほしいシステム論の用語 第7節 質的研究法としてのTEA 第8節 質的研究法とTEA/TEM

第4章 対象の拡がり（新しい個性記述）

第1節 TEA×保育・幼児教育学 第2節 TEA×看護学 第3節 TEA×言語教育学 第4節 TEA×キャリア心理学

第5節 TEA×臨床心理学 第6節 TEA×法と心理学 第7節 TEA×厚生心理学 第8節 TEA×障害者研究

第9節 TEA×経営学



A5 判
3630 円

TEA による対人援助 プロセスと分岐の記述

〔保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究〕

安田裕子・サトウタツヤ 編著

TEMから昇華したTEA（複線径路等至性アプローチ）による対人援助に関する実践的研究について、その内容紹介から研究の裏舞台までをつまびらかにした書。



A5 判
3740 円

TEMでひろがる 社会実装

〔ライフの充実を支援する〕

安田裕子・サトウタツヤ 編著

シリーズ第3弾となる本書では、外国語学習および教育、看護・保健・介護などの支援の現場に焦点をあてた論文に加え、社会人のキャリアデザイン、学生相談、臨床実践など実践的応用の事例を収録。



A5 判
3740 円

TEMでわかる 人生の径路

〔質的研究の新展開〕

安田裕子・サトウタツヤ 編著

質的研究に時間の概念を導入し、人生の径路を時間軸に沿って描き出すことで、視覚的にも理解しやすい丁寧なデータ抽出が可能になる。新しい技術による丁寧な研究法を読者に薦める、読みやすい専門書。



A5 判
3300 円

TEMではじめる 質的研究

〔時間とプロセスを扱う研究をめざして〕

サトウタツヤ 編著

複線径路・等至性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらす。人間と環境を一種のシステムとして考え、関心があることには何でも使える人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。



A5 判
4290 円

文化心理学 への招待

〔記号論的アプローチ〕

ヤーン・ヴァルシナー 著 サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽 監訳

「記号」を媒介とした、人間の未来志向的かつ動的な発達を描くことを目指す「記号論的動態性の文化心理学」について解説する。



A5 判
3190 円

M-GTA 修正版グラウンデッド・ セオリー・アプローチ

〔多分野多領域における実践と応用〕

小嶋章吾 編著 浅野正嗣 他著

福祉、介護、医療、心理等、多分野にわたるヒューマンサービス領域の課題に応える質的研究法M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）。その理論の実践化を目指す。

誠信書房
SEISHIN SHOBO

Tel 03-3946-5666 Fax 03-3945-8880
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-20-6

<https://www.seishinshobo.co.jp/>

@seishinshobo

近 刊 予 告

世界で広く読まれ、多くの学生・研究者に参照されてきた
リサーチ・デザインの定番書が遂に翻訳！

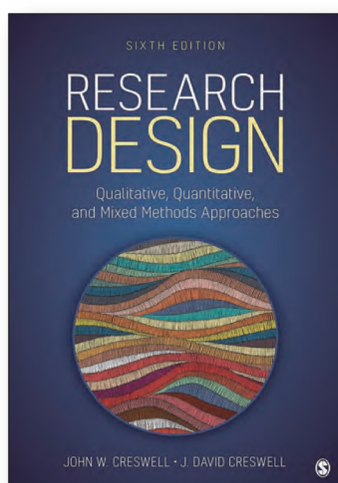
リサーチ・デザイン

[原著第6版]

質的研究法・量的研究法・混合研究法

Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches (sixth edition)

John W. Creswell, J. David Creswell



リサーチ・クエスション、アカデミック・
ライティングとともに重要となる

リサーチ・デザインを解説！

監訳

訳

安田 裕子

廣瀬 真理子

稲葉 光之

宮下 太陽

抱井 尚子

稲葉 光之

八田 太一

北出 慶子

A5・並製・予価 4,200 円

2026 年夏刊行予定

※原著書影

既 刊



人間科学のための混合研究法

質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン

J. W. クレスウェル, V. L. プラノ クラーク 著 大谷順子 訳

A5・328頁・本体3,300円＋税 2010年刊行

研究の入口から結論を引き出すまでのプロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。4つの主な研究デザイン(トライアンギュレーション/埋め込み/説明的/探求的)の手順や特徴を、具体的な研究例とともに紹介。

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町 12-8
☎: 075-431-0361 FAX: 075-431-9393

HP: <https://www.kitaohji.com> X(Twitter): @kitaohji_syobo
E-mail: eigyo@kitaohji.com

キリン・ナラヤン 著
波佐間逸博 訳 梅屋 潔 解説

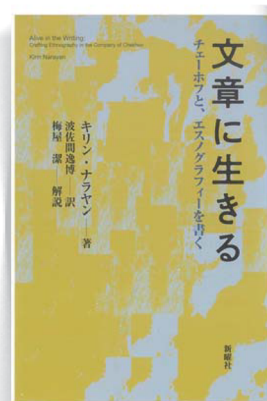
新刊

文章に生きる

チェーホフと、エスノグラフィーを書く

四六判並製 288 頁 定価 3740 円 (税込)
ISBN 9784788518650 発売日 2025/01/10

文章を書くことを通して、生きるという営みに対する共感が育ち、正確な言葉の選択によって認識が鍛えられていく。ロシアの作家チェーホフに学びながら、心を引き込む物語に整え、書き物としてのエスノグラフィーを作る技を身につける、実践的マニュアル。



サトウタツヤ、安田裕子 監修
上川多恵子、宮下太陽、伊東美智、小澤伊久美 編

2刷

カタログTEA

複線径路等至性アプローチ — 図で響きあう

B5 判並製 112 頁 定価 3080 円 (税込)
ISBN 9784788517974 発売日 2023/02/10

人びとのライフ（生命・人生・生活）のありようを図を用いて分析するTEA。研究領域が広がり、理論的にも進展するなかで、創意工夫が積み重ねられてきた。本書は魅力的な図の研究例を満載した見本帳で、TEA の歴史や基礎知識も学べる初学者必携の書。



好評既刊書

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ 編

TEA 理論編

複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ

四六判並製 200 頁 定価 1980 円 (税込)
ISBN 9784788514294 発売日 2015/03/25

TEA 実践編

複線径路等至性アプローチを活用する

四六判並製 272 頁 定価 2640 円 (税込)
ISBN 9784788514300 発売日 2015/03/25

待望の決定版登場！人間を時間的な変化と文化社会的文脈のなかで捉えるための方法として開発された TEA。その理論的背景と基本用語を解説した『理論編』、多様な分野の活用例を通して、実際の研究に活かすための勘所がわかる『実践編』の 2 分冊。

J. ヴァルシナー 著 サトウタツヤ 監訳

新しい文化心理学の構築 〈心と社会〉の中の文化

A5 判上製 560 頁 定価 6930 円 (税込)
ISBN 9784788513259 発売日 2013/01/15

心理現象が個別的であるからこそ心理学は一般的知識へと到達しうる - 人間が作り出しながら人間を方向づける文化と、文化を生きることによって文化を変容していく人間とのダイナミックな関係性をとらえる新しい文化心理学。

●TEA と質的探究学会第 4 回大会記念

広告掲載商品を学会特価にて販売します。

購入申し込みサイト (右記 QR コード)
<https://forms.gle/duZdkpuYUGjBjstG8>



新曜社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9
TEL 03 (3264) 4973 FAX 03 (3239) 2958

表示価格は税込価格です
<https://www.shin-yo-sha.co.jp/>

TEAと質的探究学会 第4回大会実行委員会

大会実行委員長

番田清美（人間環境大学総合心理学部）

大会実行委員（順不同）

飯倉充美（医療創生大学）

市川章子（国立国語研究所）

小田友理恵（山梨英和大学 人間文化学部）

鬼頭弥生（立命館大学大学院人間科学研究科）

小木貢（東京大学生産技術研究所）

菰口陽明（呉医療センター）

鈴木美枝子（東日本大震災・原子力災害伝承館）

清家かおる（(株)四国電力）

平良由香利（沖縄県立看護大学）

遠山敦子（北京語言大学東京校 キャリアセンター）

細川雅彦（高知県教育委員会）

三田地真実（教育ファシリテーション研究所／法政大学教育開発支援機構）

和仁里香（徳島文理大学保健福祉学部人間福祉学科）

サトウタツヤ（立命館大学・総合心理学部）

安田裕子（立命館大学・総合心理学部）

共催

松山観光コンベンション協会

愛媛県観光物産協会

協賛企業

(株)誠信書房

(株)北大路書房

(株)新曜社